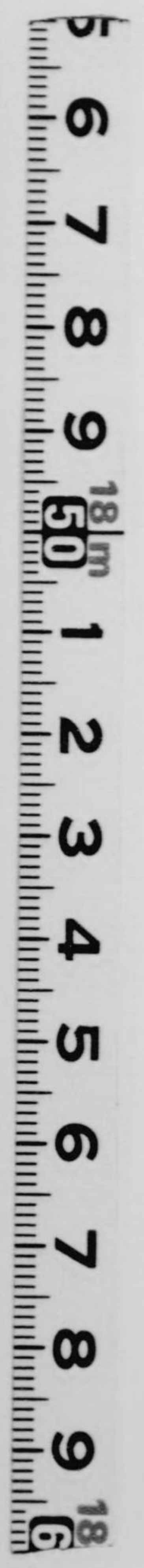
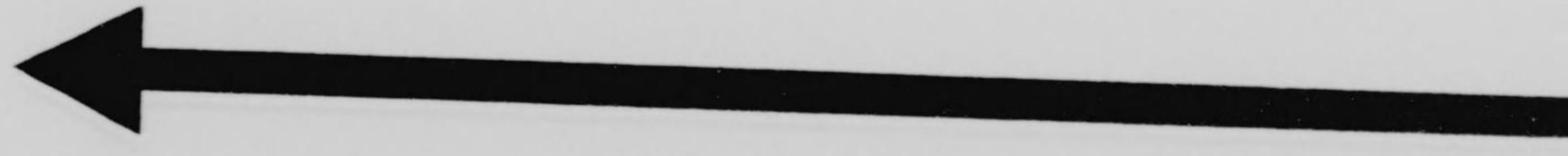


375
24



始



375-24



露 國 民 衆 文 學 全 書

第 三 編

あしる童話集

昇 曙 夢 譯 編



東 京
大 倉 書 店 發 行

大 正
8. 6. 18
交 内



序

本書は本来から言へば、寓話集とか噺話集とか題すべきものであります。が、一般に解り易い用語に従つて、童話集としておきました。内容は露國で最も有名な五人の代表的寓話作者の代表的物語を選んで譯したもので、總數百六拾七篇を収めてあります。是等の物語は、その題材を主として民間の傳説や伽喃から取つて之に教訓の意を寓したもので、てなければ名を禽獸蟲魚の性情に托して國民性や國民生活の短所を諷したものでありますから、露國民の氣質や風習が長短共に最も鮮やかに面白く描かれて居ります。従つて露國の國民性を研究するには、何よりも必要な好資料であつて、特に露國に於ては國語と國民性と寓話とは、國民生活の三位一體と言はれて居る

くらゐに密接な關係を有つて居ります。それだけに是等の物語は露國民の間に最も廣く愛讀され、殊に見童は悉く暗誦するほどに讀んで居ります。ペトログラードの「夏の園」は我が日比谷のやうな公園ですが、其所には「お伽噺のおぢいさん」と言はるゝクルイロフの銅像が立つてゐて、その周圍には毎日子供が何百人となく群を爲して、「おぢいさん」の物語に讀み耽つて居るといふことであります。その感化の及ぶ所實に偉大であると言はなければなりません。從來我邦に行はれて居るイソップ、グリム、アンデルセン等の物語に讀み倦きた少年少女諸君は、必ずや本書に於て更に新しい興味に接することが出来るだらうと信じて居ります。

譯文は兒童の理解を標準として、極めて自由な意譯にしました。のみならず、斯種の物語の性質として民間の俗語を其儘引用して居

る所が多く、それに形式が多く韻文になつて居りますので、それを其儘邦文に移すことは不可能でありますから、其邊は餘程手加減を施しておきました。また物語を作つた動機や事情に就いて、特に説明を要するものは、その物語の終りに適當の註釋を附しておきました。

終りに、本書の翻譯を手傳つて下さつた高野孤龍君の勞を記憶して、茲に深く感謝の意を表します。

大正八年五月二十日

ろしあ童話集

目次

一 トルストイ物語

蛇の頭と尻尾——細い絲——遺産の分配——猿——狼と豌豆——乳牛——鴨と月——
埃を浴びた狼——穀倉の鼠——一番美味しい梨——鷹と鶏——山狗と象——鷺と魚と
蟹——水神と眞珠——盲人と牛乳——狼と弓——網にかゝつた鳥——王様と鷹——王
様と象——悪の居所——狼と獵夫——二人の百姓——百姓と馬——二頭の馬——斧と
鏢——犬と料理人——兎と獵犬——樞の樹と胡桃の林——牝鶏と雛——鵝とその雌——
——牝牛と山羊——狐の尻尾

二 クルイロフ物語

豚——豚と樞の樹——驢馬と鷺——パルナス山——狐と驢馬——獅子の末路——狼と
鶴——狼と小羊——狼と猫——犬小舎の狼——狼と郭公——狼と牧者——仙人と熊

好奇な熊——蜜蜂の香をした熊——猿と眼鏡——猿の群——猿——鏡と猿——狼
 と狐——鴉と狐——狐と野鼠——狐——獅子と狐——狐と葡萄——獅子と羚羊と狐
 ——善良な狐——二匹の犬——車の行列——猛魚と猫——椋鳥——蛙と牛——四十雀
 ——鴛鳥の群——大砲と帆——犬と馬——瀧と泉——木——蟻——椶と蘆——鴛と土
 龍——獅子と鼠——鴛と蜜蜂——獲物の分配——獅子と狼——猫と鴛——獅子と蚊
 ——鼯鼠と鼠——通行人と犬——蠶斯と蟻——犬の友誼——デミヤンのお吸物——二
 つの樽——トリシカの外套——嘘言者——好奇者——猫と料理人——三人の男——
 不仕合せな百姓——配當——白鳥と猛魚と蝦——四部合奏——象と小狗——栗鼠と鴨
 ——手箱——雨雲——金貨——貴人——栗鼠——百姓と奉公人——二人の少年——粉
 挽爺——狩に出た兎——百姓と蛇——金翅雀と鳩——郭公と鶏——郭公と鳩——池と
 河——魚の舞踏——鮪——蛙の王様——二羽の鳩——慾張者と牝鶏——鶏と眞珠——
 鴉と鶏——建築家の狐——鼠の命議——豫言者——野獸共の疫病——小川——鴉の子
 ——音楽家——草花——森と火——多妻者——樽——主人と鼠——狼の親子——牝鹿
 と行者——犬——風——驢馬

三 イズマイロフ物語

..... 二八三

象と犬——猫と鼠——二匹の海老——二人の百姓と雲——穴藏の猫——和尚と百姓
 ——馬鹿のヒラツツカ——二人の女友達——拳銃

四 ヘムニイツェル物語

..... 三二五

時計の針——妖怪——狼と犬——哲學者——鴛と鳥——馬と驢——縛られた犬——鴛
 と金翅雀——蠅虫——二人の隣人——親友——老人と死神——熊と狐と狼——犬とそ
 の影

五 ドミトリエフ物語

..... 三四三

犬と乞食——人間と馬——小銃と兎——馬車馬——鳩の歎き——鴛と蛇——白鳥と嫩
 鳥——醫者の言——憐み——狐の説教

——目次終——

ろしあ童話集

昇 曙 夢 譯編



トルストイ物語

蛇の頭と尻尾

ある時、蛇の頭と尻尾とどちらが先に立つて歩くものかといふ事、大喧嘩を始めました。

「お前が先に立つて歩くことは出来ない。第一、お前には眼もなけ

トルストイ物語

れば耳も無いではないか。」

と、頭が言ひますと尻尾は尻尾で、

「いや、その代りに俺には力がある。貴様は一體誰のお蔭で動いてゐると思ふ。若しも俺が木に巻きつかうものなら、貴様は一寸も先へ出ることは出来まい。」

と言ひ、却々勝負がつきませんから、

「そんなら分れよう！」

と頭が言ひました。

そこで尻尾は頭から捲ぎ離れて這ひ出しました。けれど頭から離れると、間もなく、とある隙穴へホッちちてしまひました。

② 二 細い 絲

ある人が紡ぎ女に細い絲を眺へました。そこで紡ぎ女は細い／＼それは細い絲を紡ぎました。が、その人は、これではいけない、もつともつと、細い絲を欲しいと言ふのでした。紡ぎ女は一寸困りましたが、即坐に智慧を出して、

「此の絲でも太いと仰有るなら、こちらのては如何です？」

と、何も無い所を指しました。何も見えないぢやないかと、その人が言ふのを受けて、紡ぎ女は言ひました。

「それは見えないのも御尤もです、此の絲は非常に細いのですから。拵へた私にさへよくは見えません。」

智慧の足りない男は、大層嬉しがり、その見えない絲をもつと註文し

て、そしてお金を拂ひました。

三 遺産の分配

ある父に二人の息子がいました。

父は臨終の時に、二人を呼んで、

「俺が死んだら、何でも半分宛分けるがよい。」

と言ひ、そのまゝ死んでしまひました。けれど、息子達は遺産を分けることが出来ません。幾許争つても、治まりがつかえませんから、とうとう隣の人の所へ、智慧を借りに行きました。

すると隣の人が、

「一體お父さんは何う分けるかと仰つたのです？」

と訊ねるので、二人は有體に、

「お父さんは何でも半分宛分けると言ひました。」と答へました。

すると隣の人は二三度頷いて、

「それなら何も争ふ事はない。お言葉通りに、何の着物も二つに裂き、何の器物も二つに割り、何の家畜も二つに裂いたらいいでせう。さうなはらう。」

と教へて呉れました。

兄弟はその通りに致しました。そして無一物になつてしまひました。

四 猿

或る人が林へ行つて、樹を伐り倒し、それを鋸で挽き始めました。つまり樹の一端を切株の上に載せ、馬乗りになつて、一生懸命挽いてのま

した。少時すると、その人は挽き切つた所へ楔を打込んで、さうしてまた先を挽きました。それから少時しますと、また楔を抜いて、それを次の所へ打ちました。

此の様子を樹の上から眺めてゐたのが一疋の猿でした。その猿は、木挽が午睡をするのを待つてゐて、例の丸太に馬乗りになり、人間と同じに挽いて見ようと思ひました。所が楔を抜きますと、お猿さんばかりと尻尾を挟まれてしまひました。

眠つてゐた男は忽ち眼を醒まして猿を殴りつけ、さうして繩で縛つてしまひました。

五 猿と豌豆

一疋の猿が兩手に一杯豌豆を掴んで行きました。と、何うした機勢

か、その一粒がコロリと跳ね出しました。猿はそれを拾はうとして、二十粒零しました。猿はそれをも拾はうとして、此度は皆撒き散らして了ひました。そこで、猿は怒つてしまひ、とうとう豌豆を蹴散らして、駆け去りました。

六 乳牛

ある人の所に、一匹の牝牛が居りました。そして毎日大きな桶に一杯宛乳を出しました。

主人は皆に此の乳を御馳走しようと思つて、大勢の客を呼びました。主人は一度に乳を澤山取らねばならないので、十日の間搾らずに置きました。かうすれば、十日目には十桶の乳が搾れるだらうと思つたのです。

所が、牝牛の腹にあつた乳はすッ、かり干乾びてしまつて、以前程出
ませんてした。

七 鴨と月

一羽の鴨が魚を漁りながら、一日中河の中を泳ぎ廻りましたが、生憎
一疋も見附かりませんでした。やがて夜になりました時、その鴨は水
の中に映つた月を見て、これを魚だと思ひ、捉へようとして潜り込みま
した。すると、他の鴨はこれを見て、愚弄ひ始めました。

そのことがあつてから、此の鴨ははづかしがりの臆病者になつてし
まひ、水の中に魚を見附けても、もうそれを捕へようとはせず、到頭飢え
て死んでしまひました。

八 埃を浴びた狼

ある時狼が羊の群の中から一匹盗み出してやらうと思ひ立ちまし
た。そして、風下へ行きました。それは羊の群の方から来る埃で身を
隠すためでした。

すると、番小屋の犬がこれを見附けて、

「やい、狼、埃の中を来たッて駄目だ。眼でも悪くしないうちに歸れ！」
と言ひました。狼はそれに答へて、

「それ、實はそのことで違つて来たんですよ。私はずッ、と以前か
ら眼を煩つてゐるのですが、聞く所によると、羊の群から吹いて来る埃
は大變眼のために良い薬ださうで……。」
と言ひにございました。

九穀倉の鼠

一匹の鼠が穀倉の床下に棲んでゐました。床には一つの小さな孔があつて、其處から米粒が落ちて来るのでした。鼠にとつては此の上ない好都合でありました。が、此の鼠は自分の暮しひきを他の者共に吹聴してやらうと思ひ立ち、小さな孔を大きく噛み抜いて、他の鼠共を呼びに行きました。そして、

「皆さん私の家へ遊びに被入しやい。食物は充分皆に足りる程あります。」

と大勢の鼠をゾロ／＼連れて來ました。所が、孔は何處を探しても見當りませんでした。それは、百姓が床板に大きな穴の開いて居るのを見つけて、塞いでしまつたからです。

一〇一番美味しい梨

ある旦那が召使に、一番美味しい梨を買つて來いと言つて出して遣りました。召使は店へ行つて梨を求めました。商人が梨を出しますと、召使は首を振つて、

「いや、一番美味しい梨を賣つてくれ。」

といふのでした。商人も弱つて了ひ、

「では、一つ食べて御覽なさい。さうすれば美味しさ加減が解ります。」

と言ひました。すると、召使は、

「一つばかり食べた所で、残らずの梨の味か解るもんですか。」

と言つて、何の梨も何の梨もみんな少しづつ食べかけて見ました。

そしてその梨を旦那の所へ持つて來ました。旦那は直ぐ様その召使



鷹 と 鶏

トルストイ物語
を逐ひ出してしまひました。

一一 鷹と鶏

一羽の鷹がよく主人に狎れて呼ばれるとその手の上に留るやうになりました。所が、鶏は側へ寄られると、悲鳴を擧げながら主人から逃げるのでした。ある時鷹は鶏に向つて言ひました。

「あゝ鶏、お前には恩に感じるといふ心が無い。實に見下げ果てた畜生だ。その癖腹がすくと直ぐ主人の側へ行く。が其處へ行くと俺達はどうだ。野生の鳥だ。なア、俺達には力も充分ある。飛ばうと思へば誰より速く飛べる身だ。けれど俺達は人間の所から逃げもせず、呼ばれば喜んで彼等の手に留つてやる。俺達は人間に養はれてゐるといふ事を忘れないでゐるんだ。」

所が鶏の答はかうでした。

「ナニあんた方が人間の所から逃げ去らないといふのは、それは鷹の焼鳥を見たことが無いからですよ。私達は始終鶏の丸焼を見せられてゐますからなア。」

一一一 山狗と象

林の中で、山狗共がある獸の死骸を食べ盡すと、あとは何も食ふものが無くなつてしまひました。そこで年取つた一匹の山狗が、何とか生計を立てねばならぬと言ふので、象の所へ行き、

「もしくお聞き下さい。私共の所に一人の王様が居りましたが、大層我儘な性質で、私共に出來ないことばかり言ひつけましたから、私共は別な王様を立てることに致しました。で、私是一同の者を代表して

来たのですが、如何てせう、あなたが私共の王様になつては下さいませんか。私共の所は暮し向きもよし、あなたの御命令なされることなら、何ても致します。そして萬事につけてあなたを尊敬致します。さア、私共の國へ参りませう。」

と言ひました。

象はいゝ氣になつて、山狗のあとを跟いて行きました。すると、山狗はだん／＼沼の中へ象を伴れ込み、象が泥の中へめり込んでしまふと、「さア王様、何とても御命令なさい。仰せとあれば直ちに實行します。」と言ひました。そこで象が、

「ではお前に命ずる。俺を此所から曳き出して呉れ！」

と言ひますと、山狗はカラ／＼と打笑つて、

「それでは王様、鼻で以て私の尻尾に掴まつて下さい。直きに引出し

てあげますから。」

と言ふのでした。

「なに？尻尾で俺を曳出す、それは駄目だ！」

象がかう言ひますと、山狗はすかさず、

「それなら、あなたは何故私に出来ないことを命じたのです？私共が此の前の王様を放逐したのも、出来ないことを命じたからですよ。」

と言ひました。

やがて、象が沼の中で往生しますと、山狗共は寄つてたかつて、それを食べました。

一三 鷺と魚と蟹

ある池のほとりに一羽の鷺が棲んで居りましたが、もはや年老いて、

魚を捕る力もなくなつてしまひました。そこで鷺は何とか巧い工夫をして生き長らへねばならぬと考へました。やうやく思ひ當りましたから鷺は魚共に向つてかう言ひました。

「おう皆さん、あなた方は大變なことになるますが、御存じありませんか。と言ふのは他でもない。私は人間の言ふ所を聞いたのですが、何でも池を乾して、あなた方を一疋残らず捕り盡すさうです。所で、私は此の山の彼方に一つのよい池のあることを知つてゐますから、そこへ皆さんを運んであげてもよいのですが、何しろ私は此の通り年を取つてゐて、飛ぶのが大儀でなりません。」

すると魚共はいやさう言はず、是非助けて貰ひたいと願ふのでした。「よろしい。ては一つ皆さんのために盡力させよう。然し大勢を運ぶのですから、一時には行きません。お一人づつですよ。」

と鷺が言ひますと、魚共はもう大喜び皆口々に、

「私を伴れて行つて下さい！私を！」と言ふのでした。

さて、鷺は魚共を運び始めましたが、その實一疋を啣へては、野原へ行つて食べてしまふのです。かうして鷺は多くの魚を食べました。

所が、此の池の中に一疋の年老つた蟹がゐました。鷺が魚を運ぶ様を見て、こいつ油断ならぬと目をつけましたので、鷺に願ひました。

「もしく鷺さん、今度は私を新しい棲所へ連れて行つて下さい。」

鷺は蟹を捕へて飛び出しました。やがて野原に來ますと、その蟹を投げ出さうと致しました。けれど、蟹は野面に澤山の魚の骨を見ると、いきなり鉄を逆立て、鷺の喉笛にかみつきました。そしてとうとう鷺を殺してしまひ、自分は池へ這ひ戻つて、生き残つた魚共にそのことを話してきかせました。

一四 水神と眞珠

ある人が短艇に乗つて出かけましたが、何うした機勢か大切な眞珠を海中に落してしまひました。て、此の人は岸へ引返して、バケツを手に取り、水を汲んでは陸へ注ぎ始めました。さうして彼は三日三晩小止みなく水を汲んでは注いでゐました。四日目になりますと、海の中から水神が出て來まして、其の男に問ひかけました。

「お前は何故そんなに水を汲み出しては捨てるのだ？」

「私は眞珠を落しましたから、それで汲み出してゐるのです。」

その人がかう言ひますと、水神は更に訊ねて言ひました。

「では、直ぐに止める譯には行かないナ！」

「はい、海水を乾してしまつたら止めますが。」

その人がかう言ひますと、水神は急に海の中へ立歸つて、其の落された眞珠を拾つて來て呉れました。

一五 盲人と牛乳

ある時生れつき盲目の人が、眼の見える人に訊ねました。

「牛乳ツて何んな色をしてゐるものですか？」

「牛乳は恰度白紙のやうな色です。」と眼の見える人が言ひました。

「では、その色は紙のやうに、觸るとサラ／＼しますか？」と、盲目が訊き

直しました。すると眼の見える人は答へました。

「いや、それは白い麥粉のやうに白いです。」

盲人は訊ねました。

「では、麥粉のやうに柔かくて、ポロ／＼してゐますね。」

「いや、その色はたゞ白いので、恰度兎のやうな白さです。」

眼の見える人がかう言つてきかれますと、盲人は又問ひ返しました。

「では、その色は兎のやうに軟かて、フワ／＼してゐるんですか？」

そこで眼の見える人がまた言ひました。

「いや、白い色ツて言ふのは恰度雪のやうなのです。」

「は、あ、それでは、雪のやうに冷たいのですね。」

盲目はまだかう言つてゐるのです。かうして眼の見える人が幾許例を擧げて話しても、盲目の人には乳の白いといふことがどんなものか解りませんでした。

一六 狼と弓

ある獵人が弓矢を携へて獵に行き、山羊を一疋殺して、それを肩に擔

つて來ました。すると途中で野猪を見つけましたから、獵夫は忽ち山羊を投げといて、野猪に矢を放ちました。

所が傷を受けた野猪は、一目散に獵夫に向つて來て、とう／＼その人を引裂いてしまひました。そして自分も亦その場に打倒れて死んでしまひました。

生血の匂ひを嗅ぎつけたのが一疋の狼であります。だん／＼やつてまゐりますと、其處に山羊と野猪と人間と弓とが横はつてゐるてはありませんか。喜んだの喜ばないのツて、狼は小躍りして、かう考へました。

「これだけあれば當分ひだるいことはない。だが、一時に皆食べてしまふのは惜しい。無駄にならぬやう、少しづつ食べよう。さうだ、最初は硬さうな所を食べて、軟かい美味しい所はあとから食べよう。」

狼は山羊や、野猪や、人間を嗅いで見て、

「これは軟かい肉だ、あとで食べよう。先づ、此の弓の筋から食べてやれ。」

と言つて、弓の筋を咬み始めました。所が弓の筋を咬み切つたから、堪りません、弓はびんと撥ねて、狼の胸腹を打ち破りました。それで此の狼もとうとう死んでしまひました。すると他の狼共が出て来て、人をも山羊をも野猪をも、それから狼をもみんな食べてしまひました。

一七 網にかゝつた鳥

ある獵夫が湖のほとりに網を張つて、澤山の鳥にかぶせました。所がかゝつた鳥共は皆大きな鳥ばかりでしたから、網を持ちあげて、そ

れをかぶつた儘飛び出しました。

獵夫は一生懸命その後を追蒐けました。

すると、一人の百姓が、獵夫の駆け行くのを見て、

「お前様、何處まで駆けて行くつもりだ？ 幾許お前様が一生懸命駆けても、空飛ぶ鳥には追つつけませんよ。」

と言ふのでした。が、獵夫は、

「ナニ、あの鳥が一羽なら追蒐けはしませんが、あれだけゐるから、屹度追付ひて見せます。」

と、また駆け出しました。

果して獵夫の言ふ通りになりました。夕暮になりますと、鳥共はそ

れ、自分の埒の方へ行かうとして、一羽は林の方へ、他の一羽は沼の方へ、なほ他の一羽は野原の方へといふ騒ぎ。とうとうその鳥共は網

をかぶつたまゝ、又地上に落ちてしまひました。獵夫はそれをそっくり生捕りにしました。

一八 王様と鷹

ある王様が獵に行つて、一疋の兎に御寵愛の鷹を放してやりました。そして自分もその後から駆けて行きました。

やがて鷹は兎を捕へました。王様はその兎を取つて、さて水を飲まうと思ひましたが、生憎その邊にはありません。あちらこちら探してゐる中に、漸くとある丘の間に見附けました。が、その水といふのはタク！タク！と滴つてゐるばかりでした。王様は鞍の下から腕をとり出して、水の垂る下にあてがひました。水は一滴宛溜つて、やがて腕に満ちましたから、王様はそれを飲まうとして、口のそばへ持つて行

きました。

すると俄かに鷹が王様の手に飛びかゝつて、水をはぢき零してしまひました。王様はまた腕をつき出してゐました。そして暫らく待つてゐますと、水はだん／＼溜つて、腕の縁と平になりました。そこで王様がそれを口の所へ持つて行きますと、また鷹が飛びかゝつて水を零しました。

三度目に王様が水を一杯溜めて、それを唇に持つて行きました時、も矢張鷹に零されてしまひました。王様はとう／＼怒つてしまひ鷹を引捉へて、うんと石に叩きつけ、とう／＼それを殺してしまひました。所へ王様の侍従共が馳せつけましたから、そのうちの一人は早速腕を持つて、上流の泉へ水汲みに行きました。が、此の侍従も水を汲んで来ませんでした。彼は空の腕を手にして歸つて来ました。そして

「あの水は飲めません。泉の中には毒蛇がゐます。そして今も毒を水中に吐いた所でした。鷹に水を零されたのは却つて幸ひでした。もしもあなたが此の水をお飲みになりましたら、あなたのお命は失く、なつたてせう。」

と言ひました。

「さうであつたか。では鷹は自分の生命を救つて呉れたのだ。それを自分は殺してしまつた。随分ひどい報酬をしたものだ！」

と王様は申しました。

一九 王様と象

ある印度の王様が、大勢の盲人を集めさせました。やがて盲人達が集まりますと、王様は彼等に自分の象を見させました。盲人達は既に

まゐりまして、それ／＼象に觸りました。脚に觸る者もあれば、尾を擦る者もあり、さうかと思ふと尾の先の丸を燃る者、また腹を擦る者、脊を撫てる者、耳に觸る者、牙を擦る者、鼻を擦る者、それは様々でした。

少時してから、王様は盲人達を自分の許に呼んで、

「象はどんなものだつた？」

とお訊ねになりました。すると一人の盲人が、

「象は柱に似たものです。」

と答へました。この盲人は脚を擦つて来た人でした。所が次の盲

人は、

「象は箒みたいなものです。」

と言ひました。此の盲人は尾を擦つて来た人でした。尙次の盲人、

は、



悪の出所

「象は木の瘤みたいなものです。」
と言ひました。此の盲人は尾の先の丸に觸つて來たのです。それから腹を擦つて來た盲人は、「象は土塊のやうなものです。」と言ひ、横腹に觸つて來た盲人は、「壁のやうなものです。」と言ひ、脊中を撫て來た盲人は、「丘のやうなものです。」と言ひ、耳を擦つて來た盲人は、「風呂敷みたいなのです。」と言ひ、頭を撫て、來た盲人は、「臼のやうなものです。」と言ひ、牙を撫て、來た盲人は、「角のやうなものです。」と言ひ、鼻を擦つて來た盲人は、「太い繩のやうなものです。」と言ひました。
そして、盲人共は互に爭論を始めました。

二〇 悪の出所

ある山奥に一人の隠者が住んでゐました。野獸共も彼を怖れませ
んでした。で、此の隠者と野獸共とは一緒に話をし、互によく了解し
合つてゐました。

ある日のこと隠者が樹の下に寝てゐますと、其處へ鴉と鳩と鹿と蛇
とが寄つて来て、一緒に寝まうと致しました。所が、此の禽獸の間に大
變な議論が始まつてしまひました。で、その問題といふのは、此の世に
何故悪があるのかといふことです。

鴉の言ふ所はかうでした。

「此の世に悪のあるのは、みんな飢餓から来る。思ふ存分食べれば、樹
の枝に止つて、カア／＼鳴いてるだけで、實に嬉しいものだ、何を

見ても微笑される。が二日も餓えて見給へ、只もう気がひしや、いしやして、此の世も何もあつたものぢやない。自然と體が何處かへ引張られて、此所彼所と飛び廻り、ちつとも落ちついてゐられない。幸ひ一片の肉でも見付けやうものなら、ぐつと胸が迫つて来て、何の分別もなく、それに飛び蒐かる。さうなると、棒や石を投げつけられることもある。また狼や犬と鉢合せをしながら、決して身を退かぬやうな事もある。かうして飢餓のために斃れる兄弟がどの位あるか知れやしない。だから凡ての悪は飢餓から出ると言ふのだ。」

鳩の言ふ所はかうでした。

「だが、私の考へては、悪は飢餓から出るのではない、凡ての悪は愛から出ると思ふ。私達が若し一人々々て暮してゐたら、それは心配の少ないものでせう。ね、獨身なら貧しいことはない。假令貧しくとも一人

てはないか。所が私達は、まあ大概二人連れて暮すのが當然だ。そこで、自分の伴侶を愛する愛すればもう不安はつきものだ。始終伴侶のことばかり考へる、ひもじくはあるまいか、寒くはあるまいかと思つてね。またその伴侶が何處かへ飛んで行けば、もう堪つたものぢやない、鷹に攫はれはすまいか、人間に捕はれはすまいかと考へて、とうとう自分も飛び出して行く。さうして探しまはつてゐるうちに、鷹に出逢つたり係蹄にかゝつたり、ひどい目に逢ふ。若しまた、自分の伴侶が行衛不明にてもなつた時は、もう何を見ても面白くはない。飲まず食はずで、泣きながら探しまはる。かうして斃れる者が幾許あることやら！ほんとは悪といふものは愛から出るので。飢餓からではない。」

蛇の言ふ所はかうでした。

「いや、悪は飢餓から來るのでもなければ、また愛から出るので

ない、悪は意地悪から出るのだ。いゝか、吾々が若し怒ることなく仲睦
じく暮してゐられたら、それ程結構な事はない。が、併し、何か氣に入ら
ぬことが出来るかどうか、どうしても嚇と怒らずには居られない。さうなる
ともう何を見ても憎らしい。どうして此の無念さを晴らさうかと、そ
のことばかり思ひ續ける。仕舞には我と我身を忘れて、シユー／＼唸
りながら這ひ廻つて、喰ひ付いてやる奴はゐないかと探し出す。其の
時には、もう誰彼の容赦はない、父だらうが、母だらうが、構はず喰ひつ
て遣るんだ。自分で自分を食つちまふ位なんだから。だからさうい
ふ風に怒つて來ると、屹度我が身を滅すやうになつてしまふ。全く此
の世の中の悪は此の意地悪から來るのだ。」

鹿の言ふ所はかうでした。
「いや、意地悪からではない、また愛からでも飢餓からでもない。此

の世に悪の出で來るのはみな恐怖からだ。若しも怖れないで居られ
たら、そんな嬉しいことはない。僕等は敏速い足を持つて居る。力も
うんとある。小さい野獸なら角で撃退し、大きい野獸なら、急いで逃げ
てしまふが併し、怖れないわけには行かない。林の中で小枝が一本ミ
シッと折れても、木の葉が微かにサ／＼と鳴つても、怖くて身が辣み、
胸がドキ／＼して、すぐ駈け出したくなる。して息の續く限り駈ける。
と言つた具合で、兎が駈けて通つても、鳥が羽搏きしても、木の枝が折れ
ても、おや野獸が——と思つて、却つて野獸の鼻先へ飛んで行く。でな
ければ犬から遁れようとして、却つて人に出會したりする。吃驚して、
的もなく駈け出すと、崖からのめり落ちて死ぬことが能くある。又眠
つてゐる時だつて、片眼はあいて、片耳は立てゝゐなければならぬ。そ
して何時もおつかない吃驚してゐる。全く不安な生活だ。實際悪とい

ふものは恐怖から来る。」

此の時隠者が言つて聞かせました。

「皆ちがふ。吾々の凡ての苦痛は、飢餓からでも愛からでもない、また意地悪から出るのでもなければ、恐怖から来るのでもない。此の世に悪のあるのは、みんな吾々の肉體から来るのぢや。その肉體あるが爲に、餓飢も、愛も、怒りも、恐怖も生じて来るのぢや。」

一二 狼と獵夫

狼が一匹の綿羊を取つて食ひました。と、獵夫共が忽ちその狼を生擒にして殴り始めました。その時狼が聲を揚げて、

「皆さんく、何だつて私を矢鱈殴るんです。私が野獸であるのは私の罪ではありませぬ。神様が私をかういふ風に造つて下さつたのです。」

と言ひました。が、獵夫等は之に答へて、

「お前が野獸だから殴るのではない。綿羊を取つて食つたから、それで殴るのだ。」

と言ひました。

一三 二人の百姓

ある時、一人の百姓が轡に乗つて行きますと、向ふからも一人の百姓が轡に乗つて來ました。そこで、轡と轡とが絡み合ひました。

一方の男が、

「避ける、俺あ急いで町へ行かなさアならねえだ！」

と言ひますと、他の一人も、

「お前が避ける、俺あ急いで家へ歸らなさアならねえだ。」

と言ひ、二人は暫らく争つてゐました。すると、丁度そこへ通りかゝつたも一人の百姓が之を見て、

「急がば廻るがよいだ。」
と言ひました。

一三三 百姓と馬

一人の百姓が馬糧の燕麥を買ふために馬に車を曳かして、町の方へ行きました。やうやく村外れへ出ると、馬は急に頭をめぐらして家の方へ歸らうとします。百姓はびしつと鞭ちました。馬は仕方なく町の方へ歩いて行きました。そして百姓のことを考へました。

「馬鹿野郎、何處へ俺を引ッぱつて行くんだらう。家へ歸る方が餘程よい。」

町に近づきました時、百姓は馬が泥濘を歩いてゐるのを見て、苦しからうと思ひ、鋪石道の方へ向けました。所が馬は鋪石道から出ようとするのです。で、百姓は又びしつと一鞭あて、手綱をぎゅつと引きました。仕方がなく馬は鋪石道を行きました。そしてこんなことを考へました。

「何だツて俺をこんな鋪石道の方へ向けたんだらう。蹄が割れたら何うするんだ。足の下が固くツてならない。」

やがて百姓は一軒の店に着き、燕麥を買つて家へ歸つて來ました。そして家へ着くと、早速馬に燕麥を與へました。馬は食べながら、またこんなことを考へました。

「人間なんて馬鹿な者だ！俺達の前ではよく伶俐ぶつた真似をするけれど、その實智慧と來たら俺達にも劣る。醒々々々何をしてやがる

のだ？俺を急ぎ立てく何處かへ行つて来たが俺達は何處へ往つたツて、屹度また家へ歸つて来るのではないか。寧ろ最初から何處へも出ずに家にゐる方がよッ程雙方の得だ。彼奴は暖爐の上に胡坐をかいてゐられるし、俺はかうして燕麥を食つてゐられる。」

二四 二頭の馬

二頭の馬が各々車を曳いて行きました。前の馬は良く曳きました。後の馬は時々立止りました。そこで荷物は後の車から、前の車へ移されました。みんな移されてしまふと、後の馬は樂々と歩き出し、そして前の馬に言ひました。

「お前はうんと苦しんで汗水垂らすがい。精を出せば出すだけ苛められるばかりだ。」

やがて旅舎に到着すると、主人は、

「二頭で運べるのに、二頭飼つて置く必要はない。さうだ、一頭にたッぶり飼料をやつて、他の一頭は殺してしまはう。さうすれば毛皮だけでも取れる。」

と言ひました。

そして、本當にその通りにしました。

二五 斧と鋸

二人の百姓が林へ木を伐りに行きました。一人は斧を持ち、一人は鋸を持つてゐました。さて二人は一本の樹を擇んだ後、争ひ始めました。一方は斧で叩き伐る方がよいと言ひ、一方は鋸で挽く方がよいと言ふのでした。

すると其處へも一人の別な百姓が来て、
 「よし、俺が今二人の仲を直してやる。若しも斧がよく磨いてあるなら、それで伐り倒す方がよい。だが若し鋸がもつとよく切れるなら、それで挽く方がよい。」

と言つて、一人の人から斧を取り、それで伐り始めて見ました。所が斧はカラ鈍くて、逆も伐ることが出来ませんでした。

で、彼は鋸を手に取りました。見ればその鋸も碌なものではなくて、薩張挽けません。そこで彼は言ひました。

「お前達はまア喧嘩をするのは待ちなさい。斧も伐れなければ、鋸も挽けない。何より先斧を磨き、鋸の目を立て直すがいい。そしてその上で喧嘩したければするがいい。」

然し二人の百姓は、「貴様伐れもしない斧を持つてゐる癖に」「何、貴様の方がなまくらの鋸を持つてゐる癖に、——といひ合つて、前より一層激昂しました。そしてとう／＼殴り合ひの喧嘩になつてしまひました。

二六 犬と料理人

料理人は食事の支度をしてゐました。それから、犬共は勝手の扉の傍に寝てゐました。

料理人は積を屠つて、その腸を庭へぽんと投げました。犬共は早速それを攫み上げて食べるのでした。そして、

「料理人は却々いゝ人だ、料理が上手だ。」
 と言つてゐました。

少し経つと、料理人は豌豆や蕪や葱を洗つて、その刻み屑を投げ捨て

ました。犬共は急いでそれに飛びつきました。が急に鼻をそむけて、「うちの料理人は駄目になつてしまつた。以前は却々上手に拵へたつたが今はもう何處へも役に立たぬ。」

と言ひました。

然し料理人は犬共の言ふことに耳を傾けませんでした。そして自分の思ふ通りに食物を調理しました。出来た食事はやがて口に入りました。そして大變讀められました。だがそれは犬からではなく、家の主人達からです。

二七 兎と獵犬

或時兎が獵犬に向つて、

「君は僕等を追つ蒐ける時何だつてあんなにワン／＼吠えるのだ？」

若しも黙つて駆けたらもつと早く僕等を捉へるだらうに。所が君が吠えるとそれはたゞ獵夫の方へ僕等を追ひ込めだけぢやないか。だから獵夫には僕等が何の邊を駆けてゐるか解る。て早速鐵砲を提げて僕等の方へ駆けて来て、大急ぎで僕等を射ち殺す。そして君には何にも呉れはしないんだ。」

と言ひました。すると犬はそれに答へて、

「僕はそんな積りて吠えるのぢやないよ。僕の吠えるわけはかうなんだ。つまり君達の香を嗅ぎつけるとソレ捉へてやるぞといふ氣になつて嬉しさに上氣せてしまふんだ。だから何故だか知らないが、ただもう吠えずには居られないのサ。」

と言ひました。

二二八 櫨の樹と胡桃の林

ある櫨の老樹が櫨の實を一つ胡桃の林へ落しました。すると胡桃の林が櫨の木に向つて、

「もしく、お前さんの枝の下には幾許も空いてる所があるてはありませんか。お前さん自分の樹の實を落とすなら、その何も無い空地へ落したらいいでせう。此處は私達が芽を發くにさへ狭過ぎてゐるので、だから私達は自分の胡桃を地上に落さぬやうにして、人々に渡してゐるのですよ。」

と言ひました。すると櫨の樹が之に答へて、

「私は二百年も此處に住んでゐる。此の櫨の實から出る若い櫨の木もその位長らへるのだ。」

と言ひました。

胡桃の林は之をきいて怒つてしまひ、

「さういふ譯なら、私達はお前さんの子供の生長を妨げるまです。

三日と生かしては置きませんよ。」

と言ひました。

櫨の木は何も答へず、たゞ自分の子に、櫨の實から生えて來いと言ひつけました。

櫨の實は充分濕つてぼんと二つに割れ、芽の一端はいつかど地中に喰ひ入り、他の一端は上に向つて延びました。

胡桃の林はそれに目を當てまいとして、一生懸命邪魔をしました。

然し小さな櫨の木はだんくだんく伸びて、胡桃の林の蔭でも丈夫に育ちました。それから百年経ちました。胡桃の林は疾うに枯れ失

せ、たゞ櫛の實から出た櫛の木のみがひとり天にも届くばかりに高くなつて、天幕を張つたやうに四方へ枝を擴げました。

二九 牝鶏と雛

牝鶏が雛を解しましたがどうして此の雛を護つたらよいのか知りませんでした。で、牝鶏は雛共に言ひました。

「お前達はまた卵の殻の中へ這入つておくれ。お前達が卵の中に這入つてゐれば、私は以前のやうにその上に坐つて、お前達を大事に守つてゐられる。」

雛共は言はれるまゝに、卵の殻に脚を入れました。けれど、何うしてもその中へ這入つてしまふことは出来ません。唯自分の翼をくいやくにしたばかりでした。その時、一羽の雛が母鶏に向つて、

「私達いつまでもく殻の中になければならぬのでしたら、お母さんは私達を解さない方がよかつたぢやありませんか。」と言ひました。

三〇 鶉とその雌

鶉が晩くなつてから草叢の中に巢を喰ひました。で、草刈時になつても、彼の雌はまだ卵を抱いてゐました。

朝早く百姓共がその草叢にやつて來ました。そして上衣を脱ぎ、鎌を磨いて、交るく草を刈つたり、束を積み重ねたりしてゐるのでした。鶉は、刈手が何をしてゐるか見ようと思つて、飛び出しました。すると、一人の百姓が鎌を振つて蛇を真二つに切つてゐました。之を見た鶉は大喜びで、その雌の所に飛んで歸りました。そして、



羊小と狼

「大丈夫だ、百姓達を怖れるには及ばない。あの人達は蛇を刈りに来たのだ。蛇といへば、俺達は長い間、奴等に惱まされてゐたのだ。」

と話しました。けれど雌はかう言ひました。

「いゝえ、百姓達は草を刈つてゐるのです。そして、草と一緒に何でも手あたり次第に刈つてしまふのです。それが蛇であらうが、鶉の巢だらうが、またその頭だらうが、そんなことに頓着なく刈つてしまふのです。きつとさうです。私何だか蟲が知らせるやうでなりません。と言つて私には卵を運ぶ力はなした、また巢から離れることも出来ません、卵が冷えては大變ですから。」

やがて草刈りの人々が鶉の巢まで刈りつけますと、その中の一人が鎌を打ふつて雌の頭を切り離し、卵は懷に收めて、自分の子供達の玩具にさせました。

三一 牝牛と山羊

ある老婆の所に牝牛と山羊とが居りました。牝牛と山羊とはいつも一緒に牧場へ行くのでした。牝牛は乳を搾られる時は、じっさりなしにモ〜く唸つてゐました。と老婆はパンと鹽とを持出して来て、それを牝牛にやりながら、

「いゝか、大人しく立つてゐるのだよ。それぞれもつと持つて来てやる。だから大人しく立つてゐろよ。」

と言ひ含めるのでした。

次の日の夕方山羊は牝牛よりも先に野原から歸つて来て、老婆の前に立ち塞がつて、脚を開いてゐました。老婆は山羊に手拭をふり揚げてました。けれど山羊は身動きもせず立ち盡してゐるのでした。それ

は大人しく立つてゐればパンを呉れるよと、牝牛に向つて言つた老婆の言葉を覚えてゐたからです。

老婆は山羊が頑張つてゐるのを見て、棒を手にとり、ごつんと殴りつけました。

山羊が逃げ去ると、老婆はまた牝牛にパンを御馳走して、何やらチャホヤ言ひさかしてゐるのでした。これを見て、山羊は、

「人間社會には公平といふものがないわい。俺は牝牛よりも餘程大人しく立つてゐたのに、殴りつけられた。」

と考へました。

が、やがて山羊は脇に寄つて、無茶苦茶に駆けづり廻り、乳桶にうんとぶつつかつて、乳を零し、その上老婆に怪我をさせました。

三三二 狐の尻尾

ある人が狐を捉へて、

「おい、お前はその尻尾で犬を騙すことを誰から教はつた？」と訊きました。すると狐はそれに反問して、

「騙すとは何のことです？ 私共は犬を騙しはしません。たゞもう有りツ丈の力を出して逃げるだけです。」

と言ふのでした。そこでその人が言つてきかせました。

「いや、お前達はいつも尻尾で騙す。犬がお前達に追ひついて、今にも捉へさうにすると、お前達は直ぐ尻尾を一方へ振る。犬が尾に従つてひよいと身をかはさうとすると、今度はお前達は反對の方向へ逃げてくではないか。」

狐は笑ひ出して、言ひました。

「あゝ、あれですか、あれは何も犬を騙すためにするのではありませぬ。たゞ方向を換へるためにするのです。いゝすてかネ、犬が私共を追つて来たとしますよ。私共は眞直ぐに行つたら危いと見ますからちよいと方向を換へるのです。所が急に一方へ向きを變へるためには、是非共尻尾を他方へ振らねばなりません。あなた方人間でも駆けてる時に脇へ曲るには両手をさういふ風にするではありませぬか。それと全く同じなんです。これは何も私共の考へ出したことではなくて、神様御自身が、私共を造つて下さる時に、犬に捕り盡されぬため、考へついて下さつたことですよ。」

二 クルイロフ物語

一 豚

ある時、一匹の豚が殿様のお邸へまぐれ込みました。そして厩や勝手手の裏をぶらついたり、塵溜や肥溜に寝そべったり、下水の中へ轉げ込んでんだりして、そして家へ歸つて來ました。

豚飼がそれに向つて、

「おい、お前は殿様のお邸へ行つて來た様子だが、大盡の家はさぞ立派だつたらうな。話にきけば、お邸の中は金銀寶石だらけて、家具類でもなんでも、みんな値打物ばかりだといふぢやないか？」
と訊きますと、豚は

「ブーブー」とふとい首を横に振つて——「そんなことは嘘の嘘の大嘘だ。値打物なんか一つもありアしなかつた。あつちへ行つてもこつちへ来ても、塵だの肥だの、下水だのばかり。だから俺は思ふ存分、あすこの裏庭を掘りかへして来てやつた。」
と言ひました。

二 豚と樫の樹

一匹の豚が大きな樫の樹の下で、樫の實を拾つて食べてゐました。あまりどツさり食べたので、立つて居るのが苦しくなり、どツかその場に倒れると、そのまゝ眠入つてしまひました。

聽て眼を醒ますと、豚はその鼻先で樫の樹の根元を矢鱈に掘りかへすのでした。その時丁度樫の木の上に留つてゐた鴉が、これを見て、

「豚さん、そんなことをすると樹を傷めてしまふよ。根を酒しものにしてはたまりごとはない。何んな樹だつて枯れてしまふ。」
と教へてやりました。所が豚は、

「ナニ構ふもんか、こんな樹は枯れたツていい。いや、こんな樹は丸ツきり無くツてもいい。唯樫の實さへあれば俺ア困りはしない。」

と言ふ言ひ草。——そこで、樫の樹が豚に言つて聽かせました。

「コレ、豚さん！お前が若し上の方を見上げることが出来たら、そんな莫迦なことは能う言ふまい。見る、此の樫の實は俺の上に生るのだよ。」

無學な人も恰度此の豚と同じこと、眼先が利かないので、學問を屬りますすが、實は御當人も學問の實を食べてゐるのです。

三 驢馬と鶯

ある日、驢馬が鶯に逢つて、かう言ひました。

「まア待ち給へ、君は大層唱歌が巧いさうだね。僕は疾うから君の歌が聴きたい」と思つてゐたのだ。今日は恰度よい所て逢つた。さ

ア一つ歌つて聴かし給へ、そして君の技倆を僕に判断さして呉れ給へ。」

鶯は據所なく自分の藝をやり始めました。成程、その歌ひ方と言つたら巧みなもので、咽ぶかと思へば悠々と伸び、一と調子終つたかと思へばもう他の調子に移つてると言ふ有様、まるで銀の雨が樹の間を縫ふて降り注ぐやうでした。蜂共は鳴りを鎮め、鳥共は啼音を収め、家畜は草の上に横はり、牧者は息も吐かず聴き惚れてゐました。驢馬は其の頭を地面から擡げて、

「なか／＼巧い實に感心した。この分なら先づ人仲へ出てゐても耻づかしくはあるまい。だが鶯君が若しその上に最つと僕の友人の雄鶏から稽古したら、それこそ偉い上手になるよ！」

と言ひました。

鶯は此の批評を聞くと、逃げるやうに飛び去りました。

此の寓話を作る動機になつたのは、かういふ出来事でした。ある時、クルイロフの天才であることを聞いた人が、直接その寓話を聴かうと思ひまして、自分の所へ彼を招待しました。クルイロフは招待を受けて、その家に行き、家族の前で立派に數篇の寓話を朗讀しました。所が招待した主人は文學といふものを深く理解してゐなかつたと見え、それを聴き了ると、さも腹から出たやうに、

「よく出来てゐます。實によく出来てゐます。だが、あなたは何故ドミトリイエフ(寓話作者)のやうに書かないのです？」

と言ひました。クルイロフは謙遜に、

「出来ませんから。」
と言つて答へました。けれど、クルイロフの作は遙かにドミトリイエフの作よりも優つてゐたのでした。

四 パルナス山

ひかし、希臘から多くの神々が逐ひたてられて、その領土が人々の手に渡つた時、パルナスといふ山もある人の所有に歸しました。新しい持主は其處で驢馬の群を飼ひ始めました。所が驢馬共はもと此の山に學問の神や藝術の神が住んでゐたことを知つてゐるものですから、い

い氣になりまして、

「吾々が此の山へ寄越されたのは大に意味のあることだ。世間では神々に愛相を盡かして、その代りに吾々を送つたのだ。だから吾々は

大に歌つてやらねばならぬ。」
と語らひました。と、そのうちの一匹がのり出して、

「さうだ、さアこれから唱歌隊を編成つて、神々よりも巧みに音楽を始めようではないか。いか、我輩が先づ歌ひ出すから、君達も一生懸命遣つて呉れ。それから此の唱歌隊の體面を保つために、我々のよ

うな好い聲を持たぬ者は、決して此の山へ登せないことにしよう。」

と言ひました。此の奇抜な雄辯は満場の喝采を博し、一同の唱歌隊は早速音楽に着手しました。けれど、その聲と來たら丸て空樽を積んだ荷車が橋の上でも通るやうなとてつもない野暮な聲でした。

へ思ふやうにならず、病みほしくけた足を突つ張つて、漸く我が身を支へてゐるのでした。

が、それにもまして、何より情ないのは、野獸共に對して威嚴のなくなつたばかりではなく、却つて彼等から以前の復讐として様々な侮辱を加へられることでした。例へば生意氣な馬が固い蹄で蹴とばすやら、狼が齒を尖らして噛み裂くやら、牛が鋭い角で衝突くやら、それは可哀相なものでした。獅子は氣を揉みながら、如何なることをも耐へて、凝と怖るべき最期を待つてゐました。ただ時々力無い幽かな唸り聲を出して、自分の鬱憤を晴らすのでした。

不圖目を開けて見ますと、今しも驢馬が胸を張つて、自分を蹴飛ばさうとしてゐるのでした。而も一番痛さうな所を見付けてゐるではありませんか。獅子は思はず聲を揚げて、

「あゝ情ない、情ない。こんな侮辱を受けるより、いつそのこと早く死んでしまひたい。死といふものが何のやうに苦しくとも、驢馬の侮辱を受けるよりは、まだ忍び易い。」と呻きました。

七 狼と鶴

狼の貪慾なことは、どなたも御存じです。狼は獲物を食べても、決して骨を始末しません。その罰が當つて、ある狼がひどい目にあひました。

それは、狼が骨を喉にひっかけて、息を吐くことも吸ふことも出来なくなつたのです。だん／＼息がつまつてもはやふんぞつてしまふばかりになりました。所が幸ひにも、その近くで鶴に出會しましたから、

色々身振手真似をして自分の側へ招き寄せました。そして此の災難を救つて呉れと願ひました。

鶴は自分の嘴を頸ツきり狼の口に差し入れて、やつこのこととて骨を摘み出しました。そして御禮に何か呉れと言ひますと、狼は氣質が悪いてはありませんか、

「巫山戯たことを抜かすな！お禮が聞いて呆れらア。それよりか、貴様の嘴や頭が満足に俺の口から出たことを考へる、馬鹿野郎、貴様の方が俺に禮を言ふべきだ。がまアい、今日は許してやるから、足許の明るうちさ、ささと歸れ！だが氣をつけるよ、これからさき貴様は何時俺の口にかゝるか知れたことぢやない。」と嗷鳴りつけました。

八狼と小羊

ある熱い日に羊の子が小河へ水飲みに行きました。所が此處で大變な災難に遭つてしまひました。といふのは、恰度此の時その附近を一疋の狼がお腹をへらして、ろく／＼してゐたのです。狼は羊の子を見付けると、早速そのそばへ飛んで來ました。

けれども何とか尤もらしい口實を考へてから手を下さうと思ひ、その羊の子に向つて、

「ヤイ、貴様は能くもその汚らしい面で、此の清潔な俺の水に、滓や砂を入れたな。さういふ亂暴なことをされては、此方も黙つては居られない。貴様の首を取るから覺悟しろ！」

と嗷鳴りました。すると羊の子は、まるで王様にても言上するやう

に、
「狼様恐れ入りますが一言申し上げます。御覽の通り私はあなたの御前から百歩も隔つた河下で飲んで居ります。あなたに對して水を濁さうとしても濁すことは出来ません。狼様、あなたのお腹立は御無理なことゝ存じます。」

と言ひました。

「間拔奴、それは冗談だ。そんなことを本氣にする奴があるもんか。だ
が聽けよ。うひさうく、貴様は去年の夏此處で俺に失敬な眞似をし
たツたナ。畜生、俺アちやんと覚えてるんだ！」

「御免下さい。私はまだ生れてから丸一年にもなりません。大方そ
れはあなたの御兄弟で御座いましたでせう。」

小羊が、かう言ひますと、狼はますます怒つて、

「俺には兄弟はない！」

と言ひました。

「それでは、お友達かおぢさんか、兎にかくあなたの一族中の誰方かて
す。あなた方はいつも私達に悪いことをしよう／＼と思つていらつ
しやる。そして機さへあればひどい目にあはせますが、何うしてさう
なのです。今日は一つそのわけをさかして下さい。」

「ナ、何だと。ヤイ俺が何を悪いことをした？ 黙れ黙れ、もう聽きた
くはない。貴様の悪いことを拾ひあげようと思へば、こつちは何時で
も拾ひあげて見せる。第一、貴様が俺の食慾をそゝるやうな動物だッ
てことからしてよくない。」

と言ふや否や、狼は羊の子を啣へて、暗い林へ引摺り込みました。

九狼と猫

一匹の狼が命からく林の中から村へ跳んで来てぶるく身を顛はしてゐました。後からは大勢の獵夫等と一群の獵犬とが追蒐けて來ます。

此の場合、狼は何家でもよいから早く門内に駆け込んで身を隠したいと思ひました。が生憎な事に何の門も何の門も閉まつてゐました。ふと眼を舉げて見ますと、垣根の上に一匹の猫が居りましたから、狼はこれ幸ひと、その猫に向つてお願いしました。

「そこにあるのは猫さんぢやないか。濟まないがネ君、此の邊の百姓のうちで、私を隠まつて呉れさうな人は誰だか、早く教へて呉れないか。ほら犬共の吠える聲と、角笛の音とが聞えて來たらう。あれは皆私を

追蒐けてくるのだよ。」

「さうか。ては早くステバンさんの所へ行つて、お願いするがいしよ。あの人は一番善い人だから。」

と言つて、猫が教へてやりました。所が狼は、

「それはさうだらうが、私は彼の人の綿羊を殺したことがあるから。」

「それではデミヤンさんの所へ行つて御覽。」

「その人も私は怖いんだよ。先刻私はあの人の山羊の子を竊んだから、さつと私のことを怒つてゐるよ。」

「ぢや、あすこへ駈けて行きなさい、あれはトロヒムさんの家だ。」

「トロヒム？ いや、私はあの人は顔を合すのも怖ろしい。あの人は此の春から小羊の復讐をしやうと思つて、私を狙つてゐるのだから。」

「そんなことを言つたら行く所はありやしないよ！だが、あのクリム

さんならあんたを隠して呉れぬことはあるまい。」

「あゝ困つたナ、猫さん、私はあの人の積を殺したことがあるのだ！」
其處で猫は狼にかう言ひました。

「して見ると、あんたは此の村中の者にいたづらをしてゐるらしい。それであるて此處へ助けを求めに来るとは、氣が知れない。いや、此の村には災難を受けたお禮に、あんたを救つてやらうなんて、そんなお芽出度い話はありませんよ。——さうだ、自業自得とはこのことだ。蒔いた種子は刈らずばなるまいて。」

一〇 犬小舎の狼

狼が夜羊小舎へ忍び込まんとして、却つて犬小舎へ這入つてしまひました。すると犬小舎中のものが一時に起き上りました。犬共は直

ぐ身邊に狼の香がするものですから吠えるやらぶつつかり合ふやら、えらい騒ぎです。犬小舎の番人等も、

「ソレ兄弟泥棒だゾ！」

と叫びながら、忽ち門を閉めてしまひました。少時の間は犬小舎が脩羅場と化しました。棒を手にして駆ける者もあり、銃を提げて駆ける者もあります。

「火を持って来い、火を！」

といふ間に、火を持った者が跳んで來ました。見れば、狼の奴欄の片隅に脊中をくつつけて蹲つてゐました。毛といふ毛はみな逆立て、齒はキリ／＼と鳴らし、その眼色は片ツ端からみんな喰つてしまふぞと言つた風でした。

然し、相手が羊でないことを知り、どうせ相當な報を受けることにな

ると見て取りましたから、狼は早速媾和を提出しました。

「あう諸君、此の騒ぎは一體何事だ？ 私は諸君の古い兄弟分だが、今日は諸君の所へ仲直りに来たのだ。何も喧嘩に来たわけではない。今までのことはサラリと忘れて、睦しくしゃうてはないか。今後私達は決して此處の家畜に手を出さない。嘗て手出しをしないばかりでない、私達も奮つて此の家畜のためには他の者と闘ふことを敢て辭さない。此の通り誓つて言ふが、私……」

と言ひかけた時、一人の番人がそれを遮つて、

「コラ、貴様よ、よく聴け。貴様は狼だ、俺は老人だ。貴様の腹の中位はちやんと解つてゐる。だから、貴様達の皮を剥ぎとつてからでなければ、貴様達と和睦する事は出来ぬ。これが俺達の方のきまりだ——」

と言ひました。そして直ちに獵犬の一群をその狼に懸しかけまし

た。

一八一二年に佛蘭西のナポレオンが勝ちほこつた勢を以て露西亞へ攻め込んだ話は有名なものであります。その時、ナポレオンは露都のモスクワを占領しましたが、冬の寒さと糧食の缺乏と交々、到る敗北との爲、戦争を續けることが出来ず、とうとう敗殘の兵を引きつれて、退却することになりました。

「犬小舎の狼」といふ寓話は此の戦争を種子にして作られたものであります。即ち狼はナポレオン一世を意味し、番人は露國の老將軍クツゾフを象つたものであります。ナポレオンは露國に於いては失敗ばかり蒙らねばならぬと見て、媾和談判を始めたのてしたが、露西亞側ではナポレオンの提出した媾和條件を容れな

いでどしく戦争を續けたのでした。そしてとう／＼あんな酷
ひ目に逢はしてしまつたのです。

一一 狼と郭公

ある時、狼が郭公に向つて、

「郭公さん、お前さんとも最早あさらばだ。私は此の土地で安樂に暮らさうとしてみたが、それは到底駄目なことだ。お前さんは天使のやうに氣質がよいけれど、他の者は人間でも犬でもみな意地悪だから、どうしたつて喧嘩の絶えよう筈がない。」

と言ひました。

「では狼さん、あなたは遠方へお立ちになるんですネ？して、あなたが仲よく暮らさうといふ温順しい人達は一體何處に居るんですか？」

「アルカデイヤの森にさ。私はこれからひとのしに其處へ行くんだ。それは良い國だよ。あちらへ行けば戦争つて何のことだか知らないさうだ。人々はまるで天使のやうに優しく、河といふ河には乳が流れてゐるといふことだ。まア一口で言へば、黄金時代といふものだ。誰も彼もみな兄弟のやうにつきあひ、犬は咬みつかないばかりか、吠えもしないといふぢやないか。どうだ君、さうした平和な國に住ひつてことは、夢に見ただけでも嬉しいぢやないか。——ではこれで失敬する。どうか今迄の所は悪く思はないで呉れ。私はこれから其處へ行つて、平和と満足と愉快のうちに生活するんだ。此んな所にゐるのは譯がちがふ。こちらにゐれば、晝間歩くにもキョロ／＼見まはして氣をつけねばならず、夜寝るにしても安々と眠ることが出来ぬ。」

「さうですか、では狼さん折角御達者にお暮しなさい。けれどあなた

は今迄の御氣象とその齒とを此の土地に棄て、行くのですか、それともお持ちになるのですか？」

「馬鹿なことを言ふものでない。これを棄て、どうしよう！」

その時郭公は言つてやりました。

「それではあなた皮を引ん剝かれてしまひますよ。きつと引ん剝かれてしまひます。」

自分の氣質の善くない者は、よく人に對して怒つたり、不平を言つたりするものです。さういふ者はどつちへ向いても、善い人を見出しません。自分自身が第一何人とも和することが出来なからず。

二 狼と牧者

ある時、一疋の狼が牧場の附近をぶらついてゐますと、柵の中では、牧者が一番よい牡羊を選んで、その腹を裂いてゐました。犬共は順温しくそのそばに坐つてゐました。之を垣間見た狼、

「何だ、あれを俺が遣ると、みんな大騒ぎをする癖に……」
と獨語しながら、不平だら／＼遠ざかりました。

三 仙人と熊

困つた時には誰でも人の親切が有難いものです。けれど、その親切は何人にも出来るものではありません。馬鹿者なんかと交際したら、それこそとんでもないことになります。親切な馬鹿者は

敵よりも怖いものです。

ずつと町から離れたある山奥に、親兄弟もない一人の隠者が住んでおりました。

浮世を離れた生活といへば、さも楽しいやうに思ひますが、たつた一人ぼつちで暮すといふことは、萬人が萬人誰も出来るものではありません。何故ならば、苦樂を分つといふことは、人間にとつて此の上ない快事であるからです。

此の仙人も矢張一人であるのがものうくなつて來ました。て、誰かと交り結びたいと思つて、林の中をあれからこれへと歩いておりました。けれど此處は山奥のことです、狼か熊でもなければ、誰も居りません。

果して彼は一匹の大きな熊に出會はしました。けれど仕様がありませんから、先づ帽子を脱いで熊にお辭儀をしました。すると熊もそれが解つたものか、手を差伸べて握手を求めました。かうして兎や角語り合つて居ります中に、二人はだん／＼打解け合つて、とう／＼仲のよい友達となつてしまひました。と、二人はもう別れることが出來なくなつて、幾日も／＼一緒に暮しました。

二人の間にどんな話が交はされたか、またどんなことがありましたか、その邊のことは解りません。仙人も無口な方、熊とても生來だんまりの方ですから、他の者に解らう筈がありません。

然し、そんな事はとにかく、仙人は思ひがけなくも友を得て、大層喜んでおりました。何處へ行くにも彼は熊のあとを跟いて行き、熊が一寸でも見えなないと淋しくて堪らなかつたのです。熊もまたその通り、嬉し

くてくならなかつたのであります。

ある夏の熱い日に、二人はふと思ひ起つて、山野をぶらつくことになりました。所が、人間は熊よりも少々弱いものですから、その仙人は熊よりも先に草臥ました。で、どうも歩行が後れがちでした。熊はそれを見て、

「君横になつて休んだらどうだ。そして眠たくなつたら眠るがいい。俺は此處で番をしてゐるから。」

と、伶俐さうな口を利きました。

仙人は素直に、横たはつて、あゝあと欠をして、程なく眠入つてしまひました。

熊はそばについてゐましたが、何もしないでゐたのではありません。友の鼻の頭に蠅が一疋留まつたので、それを逐ひました。見れば

その蠅はまだ頬べたにゐます。それをも逐ひますと、蠅はまた鼻の頭へ戻つて來ました。かうして幾度逐つても逃げ去らないので、熊はだん／＼いら／＼して來ました。

やがて、熊は物をも言はず、大きな石を手にとりました。それから立膝に身構へて、息をも吐かず、にゐましたが、腹の裡では、

「此の蠅の畜生、生かしては置かないぞ！」

と考へてゐたのです。と見る間に、熊は凝つと友の額の上の蠅を見守りながら、有りツ丈の力を出して、仙人の額を石で打ちました。その打ち方があまり酷かつたため、頭は微塵に碎けて飛び散りました。そして仙人はそのまゝ、息絶えて、二度と動きませんでした。

一四 好奇な熊

一人の百姓が、じわ／＼と木を曲げて頸木を造つては、それを賣つて金を儲けてゐました。これを見たのが一疋の熊でございます。自分もあの仕事をして暮して行かうと思ひ、林へ行つて、胡桃や樺の木などを矢鱈折りました。そのボキ／＼と木の折れる音が、一露里も響き渡りました。

けれど、仕事と思ふやうに出来ませんから、百姓の所へ訊きに來ました。

「爺さん、一體どうした譯だらうね、私も頸木を拵へやうと思ふのだが、折ればかりゐて、ちツとも曲らないよ。何か秘訣があるなら教へて呉れないか。」

と言ひますと、百姓は之に答へて、

「教へてもいゝが、お前には逆も出來ない。その秘訣といふのは忍耐なんだから、」

と言ひました。

一五 蜜蜂の番をした熊

ある春の日に、野獸共は熊を選抜して、蜜蜂の巢の監督にしました。他に、もつと正直な者が無いわけにはありませんが、何しろ熊と言へば音に響いた蜜蜂の愛好者ですから、彼ならば大丈夫だらうと言ふのでした。

なる程、その職に就きますと、熊は蜜蜂の巢に寄つて來る者をきッぱりとはねつけました。その仕打が如何にもぶツきら棒なので、却つて

皆の者の笑を買ふ位でした。

所が茲に悪いことが出来ました。

熊はその蜜をそつくり自分の洞穴に運んでしまひました。皆の者はそれを識つて大騒動を起し、型の通りに裁判を開いて熊を免職せしめ、且此の冬中は洞穴を出てはならぬと宣告しました。

然し、蜜は取りかへされませんでしたから、熊は皆とお別れして、自分の洞穴に潜り込み、手に蜜をつけてはそれを舐めてゐました。そして時節の來るのを待つてゐました。

クルイロフの生きてゐた頃、露西亞の官吏社會には、不正な徴收や收賄や、または権力の濫用が非常に盛んでした。露國政府は是等の醜行に對して色々嚴格な手段をとりましたけれど、その効果が

あまり擧がりませんでしたから、クルイロフは政府に同情して此の一篇を作り、さうした不行跡の人々を嘲笑つたのです。

一六 猿と眼鏡

一疋の猿が年老いてだんく視力が弱くなりました。が人間の話を聞けば、これは大した不幸ではない、眼鏡さへ用ひればそれでよいとの事でした。そこで猿さん、半「ダース」ばかり眼鏡を買つて来て色々ひねくつて見た揚句の果頭のでっぺんへ掛けたり、尻尻へ縛りつけたり、嗅いだり舐めたりしましたが、一向に効果がありません。

「ちエ！人間の譚語を眞に受ける奴が馬鹿なんだ。此の眼鏡に就いては、すつかり騙されてしまつた。こんなもの何の役にも立ちはない

5-1

と言つて、猿はその眼鏡を石に叩きつけました。と、硝子はキラ／＼光つて飛び散つてしまひました。

歎かほしい事には、人間のうちにもこんな真似をするものがあります。智慧の足りない者は如何に調法な品でも、その價値を知らないため、滅茶滅茶にそれを罵倒します。それが少し募ると打ち壊してしまふのです。

一七 猿の群

智慧をめぐらして真似れば、大變利益になることでも、無茶に手を出せば、それは／＼とんでもないことになるものです！それに就いて斯ういふ話が遠い國にあります。

猿は、誰でも知つてゐる通り、大層人真似の好きな動物です。アフリカといふ所へ行きますと、さうした猿の群が、繁しい林の木の枝に棲んでゐます。ある時、一人の猿捕が身に網を纏ふて、／＼草叢の上を跳び廻つてゐました。これを、ソツと眺めてゐた猿共は、互ひに、ひそ／＼と話を始めました。

「どうだ、あの人は。面白さうだなア。本統に面白さうだ。筋斗をしたりば、ツと網を擡げたり、さうかと思ふと一塊に縮んだり、手も足も見えなくなつたりする。俺達は何でもうまいのだが、あの藝當ばかりは今日が初だ！おい、皆の者あれを一番遣つて見たいものだなア。あの人はもう充分楽しんだらうから、きツと歸るに違ひない。さうしたら早速やつて見やうぢやないか。」

果して、その人は網を棄て、立去りました。猿共は大喜び、

「さア、愚圖々々してゐるにや及ばねえ。行つて遣つて見よう！」
 と言ひながら降りて來ました。見ると網を澤山々々投げ散らして
 ありましたから、皆それを身に纏ふて、跳んだりはねたり、宙返りをした
 りしてゐました。そしてだん／＼我と我が身を捲きくるみました。
 さうなると苦しくてたまらず、キヤツ／＼と鳴くやらわめくやら、樂し
 み所の騒ぎではありません。網から抜け出ようとしても、ますますも
 つれるばかりで、ひどく弱つてしまひました。
 それをじつと見守つてゐた猿捕の人は、もうよからうといふので、澤
 山の袋を手にして遣つて來ました。猿共は逃げ去らうと思ひました
 が、誰一人遁れることは出來ません。そして残らず生擒りになつてし
 まひました。

一八 猿

自分から進んで働くのはよい。けれど、お禮や名譽を望んではず
 りません。もしさうでない、その労働は何の爲めにもならず、ま
 た何の面白味もありません。

一人の百姓が、朝早くから鋤を手にして、自分の畠を耕してゐました。
 一生懸命働くので、玉のやうな汗が顔からぼた／＼流れ落ちました。
 此の百姓は大變氣質のよい人でしたから、傍を通り過ぎる者は、みな
 「御精が出ますか」とか、「折角も稼ぎな」とか言つて褒めました。

これを見てゐた一匹の猿、羨ましくなつてしまひました。賞讃の聲
 は兎角誘惑となるものです。それを望むのは致方ありません。てお

猿さん早速働かうと思ひ、太い棒を見つけて来て、一生懸命それを弄り始めました。猿にとつては大變な御苦勞です。その棒を持ち直して見たり、提げなほして見たり、いろ／＼に引摺つたり轉がしたりしてゐました。汗はまるで河のやうにその顔から流れました。そして彼はとう／＼くたびれて、やつと呼吸を吐いてゐました。けれど誰一人此の猿に向つて賞讃の言葉をかけて呉れる者がありませんでした。それは其の筈です、いくら働いたとて、そんな働きは何のたしにもならないのですから！

一九 鏡と猿

一匹の猿が鏡の中に自分の姿を見つけて、ぞつと熊をつゝき、
 「おい君、あれを見ないか。何んて面だらう？あの不景氣な野暮ツク

さい身振を見ろ！若しも自分が間違つてあんなものに少しても似てるならば、逆も恥づかしくて生きては居られない。だが君我々畜生仲間のうちにも、あんなしやツ面をした者が慥かに五六匹はゐるよ。さうだ、指を折つて算へあげて見やうか……」

と言ひますと、熊はそれに答へて、
 「いや算へあげるには及ばない。それよりか先づ自分を省みた方がよからう。」

と言ひました。けれど熊の勸告は空しく立消えになりました。廣い世間にはかうした例が却々多いものです、誰だつて自分のことを間拔面だとは思ひたくありませんから。

私は昨夜もそれを見ましたよ。クリムイチ人の盜癖といへば誰一人知らぬ者はない。そのクリムイチ人に向つて、本の中に出てゐる彼

の盜癖のことを讀みきかしてゐる者がありました。けれど彼はそれをきゝながらそつと頷いてゐました。

二〇 狼と狐

誰でも自分自身に要らぬものなら喜んで人に與へます。けれど自分に要るものはなか／＼與へません。今そのことを寓話で説き明かしませう。物の道理を分らせるにはその方が便利です。

こゝに一匹の狼がありました。鶏の肉を鰹腹食べまして、尙其の上にな大きな肉塊をあと／＼のために貯へて、さて稻村の下で夜の睡眠をとらうと致しました。

すると其處へ一匹の狼が、お腹をべ／＼にしてやつと歩いて來ました。そして狐に向ひ、

「狐さん、困つてしまつた。何處へ行つても骨一つありつけない。犬共は意地が悪いし、牧者は眠ずに番をしてゐるし、俺はこれ此の通り腹が空つてヒョロ／＼だ。此の分てはもう餓死するより外はない」と言ひました。

「さうかネ！」

「全くその通りだ。」

「それはお氣の毒なことだ！だがまア此處でやすんでは何うだね、こんな乾草もある。お前さんのことなら私が面倒を見てやるよ。」とお世辭を言ひました。

しかし狼は乾草を欲しいのではなく、肉を欲しいのでした。けれど狐はその肉のことは一言も言ひませんでした。

かうして、狼はたゞ狐からお世辭を振撒かれた丈で、肝心の夕飯には

有りつかないでそのまゝ歸つて來ました。

一一一 鴉と狐

阿諛の善くないことは、これまでに幾度繰返して言はれたか知れま
せん。けれどそれが薩張役に立たないと見え、阿諛を言ふものは何時
も胸のうちでその機会を狙つてゐます。

ある時一羽の鴉が乾酪の塊を何處かで見つけて來ました。鴉は縦
の木に留つて、いざ食べようとしましたが、何を考へついたものか、それ
を口に啣へて居りました。

折しも一匹の狐がその近くを駆けて通りました。すると乾酪の香
がぶんと鼻につきましたので、足を止めました。それから乾酪に目が
とまりますと、もう食べたくなりません。靜かに縦の木の方へ寄つ



狐と鴉

て来て、鴉をぢつと見守りながら、く、りと尻尾を廻しました。そして
さも嬉しうに優しい聲を出して、

「鴉さん、あなたは實に美しい鳥だ。その頸つきといひ、その眼元といひ、これを他の者に話してもきつと本當とは思ふまい。あゝ其の羽、その嘴何て綺麗だらう。これではお聲も多分美しいに違ひない。一と聲歌つて呉れないか。何もさう遠慮するには及ばない。其の美しさで、尙その上に歌の名手と來たら、何うすればいゝのだ？先づ吾々の世界で女王となつて貰はねばならぬ。ね、さうだらう。」

と言ひました。

鴉は讚めあげられて、氣がぼつとして來ました。そして嬉しさのあまり喉は呼吸で塞がつてしまひました。とう／＼鴉は狐の口に乗せられて、喉から出るツたけの聲を出して、カ！と叫びました。と乾酪は

スーッと下へ落ちました。狐はそれを啣へてとつと逃げ去りました。

一二一 狐と野鼠

ある時野鼠が狐の駈けて行くのを見て、

「もしく狐さん、あなたは何だッて、傍目も觸らずに跳んで行くのてす？」

と聲をかけました。すると狐は、

「お、誰かと思つたら野鼠ぢやないか。俺は今身に覺えのない冤罪を受けて追はれて来た所さ。お前も知つてる通り俺は鶏小屋の監督だらう。所がああの仕事忙しい仕事はありやしない。碌々食事も出ず、夜の間にちく／＼眠れず、それがため俺は健康を害した位なんだ。所が主人はとんでもない罪を着せて俺を泥棒扱ひにするぢやないか。」

察して呉れよ。讒言を聞いた日には、誰だッて難癖付けられぬ者はない。俺のやうな善い狐が何時悪いことをしたことがあらう。お前だつて見たことはなからう。」

とべら／＼喋りました。所が野鼠の答はかうでした。

「いや、あなたの口端に鶏の毛が附いてゐたのをちよい／＼お見受けしましたよ。」

一二二 狐

冬も冬、大變寒い日の朝早く、一匹の狐が自分の棲所の近くで、小河の氷の穴から水を飲んでゐました。所が何うした譯だツたか、尻尾の先が濡れて、氷に凍りついてしまひました。

此の位のことでは大した災難でもありません。少し強く引張さへす

れば、毛を二三十本棄てる丈で、人の来ないうちに家へ引揚げる事が出来たのです。が、狐はこんなにはびく／＼した張りのある黄金色の尻尾を傷めてたまるものかと、暫く躊躇つてゐましたが、いや／＼まだ人も眼を醒まさないやうだから、少々辛抱してゐるうちにはだん／＼暖くなつて、自然と氷から尾が離れるであらうと考へました。そして暫らく待つてゐましたが、尻尾は尙更凍りつくばかりでした。

見れば、最早旭が登つて、人々が動き出しました。そしてその話聲も聞えて來ます。狐の方では氣が氣てありませんから、彼方此方へ身を動かし始めました。けれど氣の毒なことには、もう何うやつてもその氷の穴から離れられませんでした。

幸ひ一匹の狼が駆けて來ましたので、狐は、

「あーい、狼さんどうか助けて呉れ。にッちもさッちもつかないでゐ

る所だ！」

と叫びました。そこで狼は足を止め、狐を救ふことになりました。

所がその救ひ方が極めて簡單でした。つまり狐の尻尾をすツかり噛み切つてしまつたのです。

狐はかうして尻尾を失つたまゝ家へ歸つて來ました。そして、丸裸に皮を剥がれないでよかつたと喜んでゐました。

此の寓話はつまり小慾大損といふことを諷したものです。狐が若しも僅かばかりの毛を惜まなかつたなら、満足な尻尾を持つてゐられたてありませう。

二四 獅子と狐

生れてこのかた一度も獅子を見たことのない狐が初めて獅子に出逢ひました。そして、生きた心地もない程慄えあがりました。それから四五日経つて、また獅子に出會はしました。しかし、その時は左程怖ろしいとは思ひませんでした。さて、三度目に邂逅しますと、狐はもはや獅子と話を始めました。

私共も丁度此のやうに見慣れるまでは何ても怖ろしく思ひます。

二五 狐と葡萄

お腹を減らした一匹の狐が、とある園の中へ這入り込みました。見

ると、其處には葡萄の房がいゝ色に熟してゐます。狐の眼はひとりてに燃えました。その齒はキリキリと鳴りました。が拙いことには、ルビィ色をした水々しい房が高い所にぶらさがつてゐるのです。何處から何うしてそれに手をつけてよいのか、さつぱり解りません。眼ては見てゐるものゝ齒にはかゝりません。

狐はものゝ一時間も空しく立盡してゐましたが、やがて、

「なアに見たところは良くても、あれはまだ本統に熟してゐるのではないのだ。あんなものを食はうものなら齒が浮いてしまふわい！」と言つてぶりくしながら立去りました。

二六 獅子と羚羊と狐

ある時獅子が一匹の羚羊を逐ひ蒐けて、谷から谷へ走つてゐました。

が、漸くそれを追ひ詰めて、

「よし／＼、これだけあれば一食には充分だ。」

と思ひながら、貪慾な目つきで睨みました。羚羊の方では大變です、道は深い谷に遮られてゐて、何うにも助かりやうがありません。けれど、羚羊は身軽でありますから、其處を跳び越さうと思ひ、全力を拵つて、まるで弓から離れた矢のやうに深い谷の上へ身を飛ばしました。そして無事に向ふの岩に乗つかりました。

獅子はぼかんと立つてゐました。すると、そこへ差蒐かつたのが、親友の狐でありました。

「何だ、それ程敏捷いお前が、それ程強いお前が、あれしきの羚羊に負けてしまふのか？ お前は、しやうと思へばどんな不思議な業でも出来るぢやないか。谷間が幾許廣くても、お前が跳ばうと思へば跳べぬこと

はない。俺はなにも意地悪にこんなことを言ふのぢやない、親友として言ふのだ。親友として、お前の強いこと、敏捷いことを知つてればこそかう言ふのだ。」

此の言葉を聞くと、獅子は血を湧かし、胸を躍らして、ぼんと四本の脚を踏み離しました。けれどその谷を跳び越すことは出来ませんでした。そして、眞ッ倒まに墜落ちて、死んでしまひました。

それから、親友の狐は何うしたかと申しますと、靜かに谷底へ降りて行き、最早此の獅子に向つては阿諛も親切も要らぬと見て、氣儘氣隨に供養を始めました。そして一と月ばかりのうちに、その友の骨まで喰んでしまひました。

二七 善良な狐

ある春の日に、マリイノフカといふ聲のよい鳥が矢に中つて斃れま
した。所が残酷な魔の手はそれだけで満足せず、そのあとに残つた三
羽の雛鳥までも滅ぼしてしまひました。

漸く卵の殻を出たばかりの、あどけない、いたいけな小鳥共は、ひもじ
さ、寒さを耐へながら、徒らにあはれな聲を立て、母鳥を呼んでゐまし
た。

これを眺めた一匹の狐は、多くの鳥をその巢の下に呼び集めて、

「お、皆さん、この小鳥を眺めては誰か同情の涙を零さない者があり
ませう、誰か切ない胸の鼓動を覺えない者がありませんか？ 皆さんどう
か此の孤兒を見棄てないで、たとひ一粒宛の食物でも寄附してやつて

下さい、藁一本宛でもその巢に加へてやつて下さい。さうして、彼等の
生命を守つて下さい。慈善に越した聖いことはありません。郭公さ
ん、見ればあなたは衣換へをしてゐなされるやうだ。いつそのことその抜
け換る羽毛の若干を捲りとつて、彼等の寢床に敷いてやつては如何で
す。どうせ棄て、しまふものではありませんか？——次に雲雀さん
あなたも空高く舞ひ上つてばかりゐずに、畑なり草場なりへ行つて、何
か餌物を探して来て、そして此の孤兒に分けてやつたらいいでせう。

——それから山鳩さん、あなたの子供衆は最早大きくなりましたから
ひとりて食を求めることが出来ます。ですから、あなたは自分の巢を
離れて、此の孤兒達の母鳥の代りになつてやつたら如何です。神様は
きつとあなたの小供衆を守つて下さいますよ。——それから燕さん、あ
なたも蟲を澤山捕つて来て、此のよるべない孤兒を助けたらいいでせ

う。それから、鶯さん、あなたは、大層愛嬌のある方だ。あなたの聲には、誰でも惚れくししますよ。ですからあなたは、暖い風の吹き出す頃まで、そのやさしい歌で彼等を守らう。あなたは、その愛によつて彼等の苦しい胸を醫すことが出来ます。私はそれを信じて疑ひません。皆さん、よくお聴き下さい。私共はかうして林の中にも善良な心情のあることを證明し、且……」

と説いて來ましたが、此の言葉を言ふときに、三羽の雛鳥はひもじさのあまり、ちつと坐つてゐることが出来ないうて、丁度狐の前へ落つてこちました。

すると何うてせう？ 狐は忽ちその小鳥を食べてしまひました。それで、説法は止んでしまひました。

皆さん、何も不思議に思ふことはありませんよ。眞實に心情の良しい人は、口で饒舌らずに黙つて善い事をします。それに引換へて、善行々々と人の前に叫ぶ者は、たと善行を人にさせるのが良いといへば良いだけです。それならば少しも自分の損にならぬからです。だが自分から手を卸しては致しません。いざとなつて見ると、大概の人がかうなります。——さういふはみな此の狐の親類です。

二八二匹の犬

お邸の番をする犬に、バルボースといふのがありました。役目によつて、例の通り家の見廻りをしてゐますと、窓の上に舊友のジュリージャといふ狎が居りました。見ればふっくらした柔い坐布團の上に坐

つてゐるのです。番をする犬はその狎に向つて、まるで親身の者にて
も邂逅つたやうに優しくし、嬉しさの餘り泣き出さんばかりでした。
て、窓の下に近寄り、グー／＼言ひながら尾を振つたり、跳ねあがつたり
しました。

「ジュージャ、お前は部屋の方へ引取られてからは、何んな暮しをし
てゐる？ 變りはないか？ 昔のことを考へれば、お前と俺とは時々庭で
ひだるい思ひをしたツけな。所で、お前どんな勤めをしてゐるの？」

「言ふことはないよ、」とジュージャも話し始めました。——「内の旦那は私に何もさせはしない。だから私はたゞ氣儘に楽しく暮してゐるわよ。飲み食ひするのも銀のお皿でね。そして旦那と巫山戯て、疲れると、柔い絨氈や安樂椅子の上を轉げまはるのさ。だがお前さんは一體どんな暮しをしてゐるの？」

「俺か？」と、バルボースは尾をだらりと下げ、鼻をつき揚げて、答へました。「俺は以前の通り、寒さ、ひもじさを忍びながら、お邸を守つてゐる。そして、あの扉の下に寝ては雨に濡れてゐるんだ。そればかりぢやない、罷り間違つて吠えやうものなら、ゴツ／＼と毆られるのだ。だが、ジュージャ！ お前は一體どんな事をして旦那のお氣に入りになつたのだえ？ 力もたんと無いし、體も小さいのに、本統にうまいことをやつたなア。それに引きかへて、俺なんかはありツ丈の精を出して働いても駄目だよ。お前何ういふ風に勤めてゐるんだ？」

「どういふ風にツて、たゞ後脚で歩いてゐるのさ。」

と、嘲るやうに言つて、ジュージャは答へました。

全く、幸福にありつく人の多くは、後脚でよく歩く他人の意を迎へ

ること人ばかりです。

二九 車の行列

瀬戸物を澤山積んだ車の行列が、険しい山を降ることになりました。そこで主人は多くの馬を山の上に待たして置き、最初の一頭だけを先づ静かに曳き始めました。その馬は大層よい馬でしたから、主人の命ずる通りに車を轉がさないやうにして、殆んど腰の力で曳いてのましました。

所が上の方から之を見てゐた若い馬は、その苦しんでゐる馬を一步毎に罵るのでした。

「やい、丈夫な癖に何だ、そのさまは！ 氣を附ける脚が粘りついてしまふ。丸て姥見たやうだ！ ほら、石に引掛かる所だッた！ あーい、もつと活潑にやれよ！ あーらまた止まつた！ 其處の所はどんく左へ曳くんだ！ 馬鹿だなア！ 山奥へ這入つて行く時か、暗い夜であればまだしも、此の晝日中、而も降り道ではないか！ 見てる方て我慢しきれぬ！ あーい、そんな容易いことが出来ないのなら、水でも曳いとれ！ 俺達ならぐんぐん、やつて見せる！ 何も心配することはありやしない。それよりか時間がなくなつてしまふ。そして俺達は自分の車が曳き降せなくなつてしまふ！ なに糞構ふもんか、降りやうく！」

言ふより早く、その馬は背中を曲げ、胸を張つて、車と一緒に駆け出しました。けれど、山の下へ下へと曳くのだから堪りません。車に威勢がついて、後から馬を突つたのです。そしてとうく馬を横へ押し出してしまひました。愚圖々々してると危いものですから、馬も有りツ丈の力を出して崖だらうが、堀だらうが構はず駆け続けました。あつち

へ打突き、此方へころがり、それはく、大變なことでした。見るく、その馬は左へ左へと飛んで行きました。が、忽ち車諸共溝の中へザンブとはいつてしまひました。主人の瀬戸物などは、もう何處へやら！

此の寓話は、一八一二年にあつた歴史上の事件を諷したもので、即ちクトウゾフ將軍がナポレオンに向つて執つた行動の冷靜な所を示したのです。

三〇 猛魚と猫

若しも靴屋が煎餅を焼いたり、煎餅屋が靴を縫つたりしたら、それこそ大變です。仕事のうまく行く筈がありません。だから、他人の商賣に手を出したがる者は向ふ見ずの馬鹿だと言はれます。また實際を

見てもさういう人間は却つて仕事を滅茶々にするばかりです。その癖、老練な物識りな人に訊き質すことや、利益になる忠告を聞き入れることは大嫌ひで、忽ちのうちに世の笑ひ者となつてしまふのです。ある時、一疋の猛魚が猫の仕事をしてみたいと思ひ立ちました。何う魔が魅したのか、それとも又魚の食物に飽きたものか、それは分りませんが、とにかく、猫の所へ行つて、

「あなたが土藏の鼠を捕りに出掛ける時どうか私も一緒に連れて行つて下さい。」

とお願ひしました。

「お止しなさいよ、全體お前さんはその仕事を知らないのではありませんか？ 耻でもかゝぬうちに思ひ直した方がいゝ。商賣は道によつて明るしと言ふ通り、その道にあるものでなければ逆も駄目ですよ。」

かう言つて猫は猛魚を諫めました。がなか／＼きません。

「まア／＼さう言はず、連れて行つて下さい。鼠と言へば何しろ珍らしい物です。それにも私大分小魚を捕つた経験もありますので。」

「それ程行きたいのなら、早速出掛けるとしやう。もう恰度いゝ頃だ！」

二人は出掛けて行つて仕事を始めました。猫は充分慰みも出来、

腹も一杯になりました。さして猛魚の奴何うしてゐるかと思に行きました。すると、猛魚は口を開いて半死半生の態で横はつてゐました。

尾はもはや鼠共に食はれてゐました。

そこで猫は、逆もこいつに出来る業でないと思つてとりました。その死にかゝつた猛魚を引摺つて行つてもとの池の中へ入れてやりました。

それで結構です！猛魚にはこれがよい仕置きになります。これから後は少しは伶俐になつて鼠捕りなどに出掛けないでせう。

此の寓話を作つた動機は、ベレジナ河畔でナポレオン一世を喰ひ止めやうとしたチチャゴフ提督の失敗であります。此の提督の失策によつて、ナポレオンは自分が捕虜にならないで済んだばかりではなく、却つて敵に大損害を與へることが出来ました。

三二 掠鳥

誰にも自分の技能といふものは一つしかありません。けれども何うかすると、他人の成功を羨んで、自分には出来もしない事へ手を出す者があります。ですから私はよく皆さんに言つて置



牛 と 蛙

ます。若しも事業に成功したいと思ふならば、自分の一番得意とする仕事を勵みなさい。

ある一羽の椋鳥が生れたての頃から金鸞の啼きかたを習ひました。そして今では丸て金鸞の子でもあるやうに上手に啼りました。それから林中のものはその歌をきいて楽しんでゐました。そして誰も彼も此の椋鳥を讃めてゐました。

他の者なら此の位讃められたら、それで満足したてありませう。が、此の椋鳥はさうでなかつたのです。或る日皆が鴛を讃めてゐるのを聞きまして、非常に格氣を起し、

「皆さん一寸お待ち下さい。私が鴛の聲色で立派に歌つて見せますから。」

と言つて眞面目に歌ひ出しました。けれど情ないことには丸ツきり調子が違つてゐます。ビバ／＼鳴いたり、ゴロ／＼喉を鳴らしたり、山羊見たやうに唸るやら、小猫のやうに喚くやら、てんで歌にも囀りにも成つて居りませんでした。ですから集つてゐた小鳥達はその囀き聲を聞いて、みんな逃げ散つてしまひました。

どうです椋鳥さん、そんな真似をして何の利益がありました？下手な鶯となるよりも、天晴な金鶯の聲で囀つてゐる方が何の位よいか知れませんか。

三三一 蛙と牛

ある時、一疋の蛙が牧場で牛を見受けますと、自分もあの位な體格になれさうなものだと思ひました。此の蛙は大變倍氣深い蛙でした。

て、早速力み出して、一生懸命體を膨らませ、さて傍にゐた友達に向ひ、
「おい君、見て呉れよ、俺だつてあの牛位にはなつたらう？」
と言ひました。

「いやまだく！」

「どうだ、今度は大きく膨らんだぞ。見て呉れ、これでもまだか？」

「まだく、逆も較べものにならなう。」

「よし、これでもか、これでもか？」

「同じ事だ。」

それならもつと力んでやれと、その蛙はだんく／＼だんく／＼膨れて行つて、とう／＼ぼん／＼と張り裂けてしまひました。好きな蛙はかうして、牛と競争して死んでしまひました。

しかし、此のやうな例は世間に少なくはありませぬ。小商人が紳商

のやうな暮しをしたり、士百姓が貴族の真似をしたりするのは、この類ではありませぬか。

三三二 四十雀



ある時、一羽の四十雀が海面へ飛んで行つて、これから海を焼き拂つてしまふと大言を吐きました。

すると、その噂が忽ち四方八方へ擴がりました。海中に棲んでゐる者共は大恐慌を來しました。そのうちに鳥の群はあちらからもこちらからも飛んで來る、野獸共は林から駆け出して來て、見物するのでした。ごたすた集まつた者共は、見ない先からその奇蹟に驚嘆してゐました。そして、何れも片唾を呑みながら海の方を凝つと瞋めてゐました。でも時折誰かの口から、

「もう沸き騰つだらうよ。もう焼け始まるだらうよ！」
といふ囁きが聞えました。

所が幾許待つても海は燃え揚りません。ては沸き立つ位は沸き立つたかと言ふに沸き立ちもしません。

それなら大きな企てはどうかつてしまつたのか？と申しますと、何のことはない、その發頭人たる四十雀は心に耻ぢて自分の巢へ逃げ去つてしまつたのです。

四十雀は色んな噂を立てたけれど海は燃えませんでした。

三四 鷺鳥の群

一人の百姓が長い棒で鷺鳥の群を町の方へ追つて行きました。此の人は鷺鳥を賣りに行くのでありますから、大切にそれを取扱つて

ゐました。そればかりではありません、今日は市場でひと儲けをしやうといふので、急いで行きました。(尤も金のことになりますと、鷺鳥ばかりでない、人間さへも妙に氣をまはすことがあります。)

百姓に何も悪い所はありません。けれども鷺鳥共は此のことを變な風にとりました。そして、途中一人の通行人に向つて、散々百姓のこ

とを訴へるのでした。
「もしく少々お聞き下さい、私共位可哀相なものは亦とありませんよ。この百姓は私共をそれはく馬鹿にしてゐるのです。そして、普通の鷺鳥のやうに私共を逐ふのです。これでも私共は嘗て羅馬を救つた名高い一族からその血統を引いてゐるのです。ですから私共に對しては相當な敬意を拂ふべき筈なのに、此の百姓は無學なものですから、そんなことはとんと御存じないのです。世が世であれば、

私共のために祭日を設けて、盛んに崇め奉るのでせうが！」

鷺鳥共が斯う言ひますと、その通行人はこれに向つて、

「しかし、お前さん達が特別な扱ひを受けたいといふ理由は一體何てすか？」

と訊ねました。

「それは今申した通り、私共の先祖が……」

「それは解つてゐます、書物の中でも読みましたから、そんなことは、すっかり知つてゐますよ。けれど、私のききたいのは、お前さん達がどんな偉業を立てたかといふ事です。」

「ですから、私共の先祖が羅馬の危急を救つたと言つてゐるではありませんか？」

「まだ、そんなことを言つてゐる。さうぢやない、お前さん達が何んな偉

いことをしたかと訊いてゐるのです。」

「私共は別に何もしませんが。」

「それなら、お前さん達は少しも偉いことはありませんよ！先祖のこととは先祖のことです。あなた方の手をつける所ぢやありません。彼等は自分の功績によつて尊敬を受けたのです。お前さん達は黙つてピフテキになればそれでよいのです。」

も少し此のお話を詳しく話してもよいのですが、さうすると鷺鳥に怒られますから、これにて止めて置ませう。

此の寓話の内容はかういふ傳説から來てゐるのです。——西洋紀元前三百九十年にガールといふ民族が羅馬へ攻め寄せました。すると羅馬の人々が町の大門を固く閉ぢて防ぎますので、ガール

はそれを圍んでゐました。ある夜のこと、ガールは闇に乗じて城の壘壁に這ひあがりました。所が城の中に飼つてありました鷲鳥共がそれに驚いてえらい聲を揚げました。羅馬の人々は鷲鳥の鳴聲に目を醒まして敵を撃退し、まもなく舊の平和に歸ることが出来たといふのです。

三五 大砲と帆

ある船の上で大砲と帆とが怖ろしい大喧嘩を始めました。大砲はその細長い口を舷側の穴からぬツと突出して、空の方へ向つてかう訴へました。

「あゝ、神様！取るにも足りない布で拵へられた者が、我々とその力量を競うなんて、そんな大それた事が開闢以來ありましたらうか！苦し

いゝ、我々の航海中彼等は何をしてゐたと思ひます？たゞ風に吹かれて、偉さうに胸をふくらまし、まるで立派な位にても即いてゐる者のやうに、大海原を運ばれて来ただけです。彼等はたゞ威張りくさつてゐるだけです。所が我々になりますと、戦場で勇しく轟き渡るのです。此の船が海上に覇を握つてゐるといふのも、全く吾々あればこそではありませんか？到る處へ死と恐怖とを賚らすものは我々にはありませんか？——いゝ、え、我々は最早帆なんかと一緒に居るに忍びません。あんな者は無くとも、我々は我々て立派に航海できます。力強い北風様、今直ぐ飛んで来て、我々にお助け下さい。そして彼等を滅茶々に破つて下さい。」

北風は此の願をきゝ入れて、本當に吹いて来ました。海は怒つて黒くなり、空は重い黒雲に覆はれ、波は山のやうに起ち上つては崩れまし

た。雷鳴は耳を聳にし、電光は眼を盲にするほどに、北風は荒れに荒れ、狂ひに狂つて、帆を滅茶々々に引き裂きました。そしてその破れた片布がふっ飛ばされてしまふと、風は静まつて、空模様はよくなりました。所がその結果はどうなつたかと言ふと、帆が無くなつたので、船は風と波との玩具となり、木の葉のやうに海上を漂つてゐました。と、折悪く敵の船に出會ひましたから堪りません。また、く間に舷側一面に砲弾を受け、飾のやうになつて動きがとれなくなりました。そして石でも沈むやうにぶく／＼と大砲もろとも海底に没してしまひました。どんな國でも、その部分部分がみな立派に整頓して居る時始めて強いのです。さういふ國は大砲を以て外敵を威嚇することも出来ず、けれど其の國には政權といふ帆が無ければならん事を忘れてはなりません。

ゴロゴロは此の寓話の出所を次のやうに説明してゐます。「軍人社會の一部の者が、一國の萬事は一に兵力を基礎とせねばならぬ、一國の消長は兵力如何に依ると、盛んに力説する一方に於て、爲政者側の者は、一部軍人社會の者が自分の天職の眞價を解しない爲に何も彼も甘く行かぬと言ひ始めた時に當つて、クルイロフは此の有名な大砲と帆の争ひを書いて、兩者の權限を明らかにし、大砲無くば國防成らず、帆なくば萬事運轉せずと言ふたのです。」

三六 犬と馬

ある時、百姓の家に飼はれてゐた犬が、馬と功名争ひを始めました。犬の言ひ分はかうでした。

「おい／＼俺の考へによると、お前なんかはまるッきり此の邸から逐出されてもいい。なる程車を曳いたり畑を耕したりすることは大したものだ。お前のやうによく稼ぐものは亦とあるまい。けれども俺と較べたら、お前などは何の値打もありやしないぞ。俺はナ、夜晝休みなしに働いてゐる。晝は牧場へ行つて監督をし、夜は歸つて家の番をするんだ。どうだい、偉いものだらう。」

之に答へて、馬が言ひました。

「無論お前の言ふことは正しい。だがお聞きよ、俺が若し畑を耕さなかつたら、お前は此處で何の番をする？ 何も番するものはあるまい。」

三七 瀧と泉

岩角から勢よく落ちてゐる瀧がある時、効驗ある靈泉に向つてかう

いふ生意氣なことを言ひました。

「是れは怪しからん。お前はそんなに小さく、水も碌に持つてはゐないが、それであつてお前の所にはいつも客が一杯だ。誰でも俺の所へ来て吃驚するのは不思議ぢやないが、お前の所へ行くのは一體何ういふ譯だ？」

山の麓から滲み出てゐる泉は、氣をつけなければ眼にとまらぬ位でありました。その醫治の靈力は音に響いてゐました。ですから瀧に向つて、

「病氣を治しにさ。」
と溫和しく答へました。

三八木

ある時、一本の若い木が斧を提げた百姓の來るのを見付けて、

「あ、もしく、お願ひですから私のめぐりの林を伐り拂つて下さい。こんなことでは私は樂々と伸びることが出来ません。太陽の光線も見えなければ、風通しも悪く、根も充分に張る空隙がないのです。私の上の方には此の通り天蓋が出来てしまつてゐます。私の生長する邪魔物さへなければ、私は一年増しに美しくなつて、此の谷一杯に自分の影を擴げて見せます。だが今の分では、まるで枯枝のやうに瘦せてゐます。」

と言ひました。百姓はさも親友にても言はれたやうに、これを聽入れ、早速斧に手をかけて、親切を盡しました。

木の周囲は伐り拂はれて、大きな空地が出来ました。

然し此の木の勝利は少時の間でした。忽ち太陽には照りつけられる雨や霰には打たれる、そして、とうとう風のために吹き折られてしまひました。

その時一匹の蛇が此の木に向つて言ひました。

「お前も餘程馬鹿だなア！さうした不幸もみんな自分から出たことではないか？林の中に交つて、生長してゐた頃は、風雨も炎熱もお前に損害を與へなかつた。つまりお前は古い多くの樹に守られてゐたんだ。だから若しも時節が来て、それ等の樹がなくなつてしまへば、その時はお前獨り大きく頑丈に育つたのだ。そして、今のやうな災難には逢はずに済んだのだ。さうなれば幾許風が吹いても、お前はそれに抵抗することが出来たかも知れないのだ！」

三九 蟻

ある處に非常な強力の蟻が居りました。そのやうな蟻は昔の何時の頃にもあつた例がないのでした。彼は人の話によると、大麥の粒を二個持ちあげる事が出来たさうです。それに加へて、其の元氣なこと言つたら、まるで奇蹟のやうに思はれてゐました。蚯蚓を見れば直ちに之を刺しとめ、蜘蛛を見れば一人て闘ひに出掛けるといふ有様です。それから蟻塚の中では、話といへば彼の事、持切つてゐました。さういふ絶大な名譽を此の蟻は擔つてゐたのでした。

私はあまり譽められるのは却つて害になると思ひます。けれども此の蟻は性質が違つてゐて、さういふ名譽を嬉しがるのでした。彼は自分の傲慢によつて、益々有頂天になり、全く人の評判する通りだと思ひました。そして終には都會に出て一と旗あげやうと志しました。で、先づ一番大きな百姓の乾草車に乗り込み、威張りくさつて町の方へ這入つて行きました。所がそこで傲慢の鼻は、ホキツと折られてしまひました。

彼は市場中の者が、まるで火事場にも集るやうに集つて来るだらうと思つたのでした。が、此の蟻のことなどを言つてゐるものは一人もありません。誰もみな自分のことに奔走してゐました。そこで、蟻は一枚の木の葉を取つて曳き始め、伏したり仰いだりして見ましたが、一向見て呉れる者がありません。そのうちに、曳き草臥れてしまひ、とう／＼ヤケを起しました。そしてとある荷車の脇に犬の寝てゐるのを見て、それに斯う言ひました。

「お前さんにだから話すのだが、此の町の人達は本當にわからず屋の

眼無しだなア。さうてはないか、俺がこれ程凡一時間も曳つぱり廻してゐるのに、それを認める者がないのだ。俺等の蟻塚へ来て見給へ、此の俺を知らぬ者は一人だつてないから。」
さう言つて、蟻はすごく／＼家の方へ歸りました。

これと同じく、自分こそは英名を天下に轟かしてゐると思つてゐる者があります。が、その實彼はほんの小さな自分の周圍に聞えて居るばかりなのです。

四〇 樫と蘆

樫の木と蘆とが、或る時こんな話を致しました。

「蘆さん、本統にお前は天を恨む権利があるよ。雀一羽でさへお前に

とつては重たすぎる。また軽い微風がさつと小波を立て、お前は身を揺られ、弱らせられる。そして見るも憐れな程お前ひとり身を撓めるてはないか。其處へ行くと、俺は何うだ。雷に太陽の光線を遮つてゐるばかりではない。旋風も雷雨も笑つて受け流し、あのカフカズの連山と肩を駢べて、駘然と矗立してゐる。まるで犯すべからざる平和に抱かれてゐるやうだ。お前にとつては凡てが暴風のやうに思はれやうが、俺にとつては何でも春風のやうだ。若しお前が俺の近くに生えてゐたら、此の枝の厚い蔭で蔽ふてやるのに、そしてお前を荒い風波から守つてやるんだが。残念なことには、さうした騒がしいエオル（風の神）の領土を分けて貰つたのは、よく／＼お前の不運だ。あゝ天は少しもお前達のことを心配して呉れないのだ。」

「いや、樫の木さん、あなたは大層憐み深いお方です。けれどさう悲観

したものではありません。私はこれにて満足してゐます。旋風が来ても私は自分のことは少しも氣にかけません。私は撓みこそすれ折れる氣遣ひはありません。てすから嵐だとして私に害を及ぼすことはたんとありません。が、無論今迄の所では嵐の力があなたの力に叶ひませんでした。嵐の打撃にあなは頭を傾げませんでした。けれども最後の時が来て見なければ解りません。」

と、蘆の言葉が終るや否や、忽ち北の方から雨霰を伴ふた大風がどつとやつて来ました。檜の木は頑張つてゐましたが、蘆はびつたり地に伏してゐました。大風はその力を倍して狂ひました。そしてとうとう上には高く天を摩し、下には深く地獄を踏んでゐた檜の木を根こぎにしてふつ飛ばしました。

四一 鷲と土龍

如何なる者の勸告をも侮つてはなりません。侮る前によくそれを吟味しなさい。

遠い所から飛んで来た鷲の牝と牡とがある深い森に留りました。そして何時までも、其處に棲んでゐやうと思ひました。で、先づ一本の高い檜の木を選び、その頂に巢を作り始めました。そして夏になつたら其處で雛を立てやうといふ考へてした。

此のことを聞きつけたのが一疋の土龍であります。彼は此の檜の根がまるで朽ちてゐることを知つてゐましたから、早速其のことを鷲に申し上げ、此の樹を棲家とするのは間違つてゐる、何時倒れるか知れな

いから巢を作らぬ方がよいと勸告しました。

所が鷺は初めから土龍の言ふことを馬鹿にして、てんで之をとりあげなかつたのです。また、そんなことを聴くと、慧眼なる鷺の名譽に拘はると思つたのです。そればかりでない、土龍如きものが鳥類の王ともいふべき鷺のすることに、横口を入れるなどは以ての外だと思ひました。

ですから土龍とはあまり言葉を交さないで、自分の仕事を急ぎました。で、漸く新しい棲家が出来上りました。萬事萬端都合よく運ばれて、最早、鷺は雛の母鳥となつてゐました。

所が何うてせう？——或る朝、鷺が狩に出掛けてどツさり朝餌を捕り、高い天空から自分の家へと降りてまゐりますと、その椋の木が倒れてゐるではありませんか。のみならず母鳥諸共、雛が皆、壓し潰されて

ゐるのです。鷺は身も世もあらず、歎き悲しんで、

「あゝ、情けない！情けない！これもみんな自分が親切な勸告を聴き入れなかつた傲慢の報いだ。然し、取るにも足らぬあの土龍がこんな良い勸告をするだらうとは、どうしても豫期出来なかつた。」

と言ひました。すると土龍が土穴からヌツと顔を出して、
「だから言はないことではないのです。私はいつも地下に自分の穴を掘つてゐます。ですから木の根に出會はせば、その木が健康であるか無いかは確實に知ることが出来ます。あなたが若し私を侮らなかつたならば、つと此のことを思ひ起したに相違ありません。」
と言つて聴かせました。

四一獅子と鼠

ある時一疋の鼠が獅子の所へ来て、此の近くの木の洞に居させて貰ひたいと言ふお願ひをして、そしてかう言ひました。

「聞けば、此の林ではあなたが一番強く、また一番偉いといふことです。つまり力に於いては誰一人あなたの右に出る者は無く、その吼聲と來たら百獸を戦かせるといふ話です。けれどもこれから先の事は誰にも解りません。何時誰が誰の力を借りなければならぬか、知れたことではありません。私は身装こそ至つて小さい動物ですが、時にはあなたの役に立つことがあるかも知れません。」

すると獅子は頭から嗷鳴りつけて、
「何を貴様は小癩なことを吐かすのだ。その無禮な物言ひ、正しく死



鼠と獅子

刑に當るべきものであるが、今度だけは耐へてやる。足下の明い中にさつさと失せろ！愚圖々々してれば貴様の死骸まで失くしてやるぞ！

と言ひました。其所で鼠は驚いて、我をも忘れて駆け出し、忽ち姿をくらましてしまひました。

けれど獅子の傲慢はなかく消え失せさうにも思はれませんでした。それで何か獲物を探して来やうと出掛けるが早いか、忽ち網にかかつてしまひました。いくら力があつても何のたしにもなりません。てした。いくら吼えても唸つても無駄でした。斯うして暫らく悶擾いてゐましたが、矢張獵師の獲物となつて、檻に押込められ、人々の見世物に運ばれて行きました。

その時獅子はあはれな鼠の事を思ひ出し、若しも鼠が居つたなら網

を噛み切つて、自分を助けて呉れただらうが、あゝ失敗つたことをした、とう／＼自ら自分の傲慢の餌となつてしまつた、と考へました、が、もはやとりかへしはつきませんでした。

皆さん、私は眞理が好きですから、此のお話へ一言つけ加へて置きます。といつて何も自分の考へ出したことではありませぬ、俗間に言はれてゐることです。

井戸に唾を吐くな、水は何時でも腹の足しになる。と、全くその通りです。

四三 鷺と蜜蜂

ある時、鷺が花のまはりを飛びまはつてゐる蜜蜂を見て、

「お前もよく／＼不運な奴だな。そのやうにセツセと稼ぎ廻つてゐる

所を見ると、全く氣の毒でならぬ。一と夏中、數千疋も寄つてたかつて一個の蜜房を作つてゐる。が後になつてお前の仕た事を見分けてくれる者はありやすまい。それなのに、朝から晩まで精を出すとは、益々氣が知れない。一體何ういふ積りなんだ？ さうして皆のものと一緒に死んでしまへば、薩張目立たないではないか。我々と較べると雲泥の相違だ！俺が此の翼を擴げて雲の下まで舞ひ揚がらうものなら、地上の者悉く怖れて、鳥などは地から飛び立つことも出来ない。牧者等は、牧畜の側へ寄つて警戒する。鹿も俺を見やうものなら、野に現れることが出来ないのだ。」

と、輕蔑したことを言ひました。が、蜜蜂の答へはかうでした。

「あなたは偉い、立派です！ 尙その上にもゼツスの神はあなたに恵みを賜はるてせう。併し私は大勢のために働くのが嬉しいので、自分の

仕事を殊更目に立つやうにしやうとは致しません。けれども、我々の
蜜房を眺める時には、此のうちに私の集めた蜜も多少はいつてゐるの
だと思はれて、それが何よりの慰めてす。」

四四 獲物の分配

何うした譯でしたか、犬と獅子と狼と狐とが隣り合つて暮してゐま
した。そして互の間にかういふ約束を結びました。それは獲物を
捕る時には皆一緒になつて捕り、どんなものでも平等に分配しやうと
いふのでした。

さて、ある時のこと、何ういふ風に、何を以てとつたのだから知れませ
んが、兎に角最初に鹿を捕へたのは狐でありました。狐は早速同僚の所
へ使ひを遣つて、よい獲物を分けるのだから来て貰ひたいと言ひまし

た。

本統に素的な獲物でした。皆遣つて来ました。獅子も来ました。
すると、獅子は爪をもぐぐ動かしながら、皆の者を見廻して分配に
とりかかりました。

「俺達は四人だらう。」

と言つて、鹿を四つに引き裂きました。

「さア分けよう！だが、いか、此の一片は約束通り俺の分た。それか
ら此の一片は、言ふまでもなく獅子たる俺のものだ。それから此の一
片は、俺が誰よりも強いから矢張俺のだ。それから此の最後の一片だ
が、貴様達の中誰でも之に手を出せば、そいつの生命はないものと思へ。」

四五 獅子と狼

一頭の獅子が朝飯に羊の子を食べてゐました。するとその食卓の廻りを一疋の小犬がぐる／＼繞つてゐましたが、獅子の手元からちよいと肉片を一つ取りました。

さすがは百獸の王であります、それを大目に見て、少しも怒りませんでした。小犬がまだ何も知らぬ幼稚いものであつたからです。

所が、一匹の狼がそれを見て、あの獅子は弱蟲に違ひない。だからあんなに温和しいのだと思ひました。そして小犬のやうに羊の肉へそつと手を延ばしました。けれど狼はひどい目に逢ひました。そして自分が獅子のお皿へ入れられてしまひました。獅子は狼を引裂きながらかう言ひました。

「やい畜生、小犬を見て自分も同じ取扱ひを受けやうと思つても駄目だ。小犬はまだ頑是ないのだが、貴様は子供ぢやあるまい。」

四六 猫と鶯

猫が鶯を捉へて、それに爪を立ててじわ／＼と締めつけながらかう言ひました。

「さア鶯さん！お前は歌にかけては名の通つたもの、傑れた歌ひ手と肩を駢べてゐるといふことだ。狐の言ふ所によると、お前の聲はそれは／＼細い床しいもので、お前の美しい歌を聞くと、牧者でも牧女でもみな酔はされてしまふといふことだ。私も一つお前の歌をきいたいものだ。何もそんなに顔えることはない、え、おい！さう頑固ぢや困る。それ／＼怖がるには及ばない、お前を食つてしまはうといふのではな

いのだ。だから一つ何か歌つてきかして呉れ。さうすればお前の望み通りに放してまた森や林で遊ばしてやる。私が音楽に興味を持つてゐることは決してお前にも劣らない。寝る時などは何時もごろごろ、ごろくと獨唱してゐる位だ。」

けれど此の憐れな鶯は猫の爪にしめつけられて、やつと呼吸をしてゐるだけなのです。が、猫の方では一向平氣なもの、尙も言葉を續けて、「さ、何うしたのだ？歌へ、一寸てよいから歌へ。」

と強請むてゐます。しかし鶯は歌ひませんでした。そして唯ヒヒヒと言つてゐました。すると猫は嘲笑ひながら、

「何だ、お前はそんな聲で林中の評判を占つてゐたのか？皆の喧傳てるやうな涼しい聲も力もありやしなないぢやないか？」と責め、更に、

「そんなヒヒいふ聲なら、自分の子供等から聞いて聞き飽きてゐる。いやさ、見受ける所、お前は丸つきり歌が出来ないのだらう。それなら仕方はない、齒牙に載せての味はどんなものか、ちよいと試してやらう。」

と言つて、とうとう其の憐れな鶯をきれいに食べてしまひました。

此の話の意味を、ソツと話しませうか？猫の爪に押さへられてゐては何んな鶯だつてよい歌は出ない、といふことです。

四七獅子と蚊

力ない者を笑つたり、弱いものを馬鹿にするものではありません！弱い者でも非常に残酷な復讐をすることがありますから、あまり自分の力を鼻にかけない方がよいのです。おき、下さい、茲に一匹の獅子

がその高慢のために、蚊から苛められた話があります。私は他所で聞いた話ですが、それはかうなのです。

ある時獅子が蚊に向つて、それは酷い侮辱を加へました。蚊はぐつと癢に障つてしまひました。で、どうしても我慢出来ないの、身仕度して獅子に戦争を挑みました。そして自ら兵士ともなり、自ら喇叭手ともなり、喉の續く限り鳴き喚いて、獅子を決闘に呼び立てるのでした。獅子は笑つてゐましたが、蚊の方では冗談ではありません。背面から獅子の眼や耳へ襲ひかかりました。そして場所を狙ひ、頃を見澄して、驚のやうに獅子へとびつき、腰のつけ根に向つて針を刺しました。獅子はびくりとして、敵手を尾で打ちました。けれども蚊はひらりと身をかはして逃れ、怖るゝ色もなく、顔の真中に留つて血を吸ひ始めました。獅子は頭を揺り、鬣を振りました。然し大膽な蚊は構はず自

分の思ふ通りに致しました。そして獅子の鼻に這入つたり耳に飛び込んだりしました。

獅子は憤つて、怖ろしい叫び聲を揚げて、キリキリと歯を噛み鳴らし、爪で以てやたらと地面を掻きました。その叫び聲にあたりの林が揺れましたので、野獸共は大恐慌するて洪水か火事でも始まつたやうに、足は續くかぎり逃げ惑ふて隠れました。だが皆の者を此のやうに騒がしたのは、皆蚊のしたことでした。

獅子は足掻き悶掻いた末、とうとう力が盡きて、地面に打ち倒れ、蚊に向つて和議を乞ふのでした。蚊は充分腹癒せが出来ましたから獅子の願ひを容れてやりました。それから蚊は勇士のアキレスから一躍、詩人のホーマーとなりすまして、自分の勝利を歌ふため林の中へ飛んで行きましました。

四八 鼯鼠と鼠

「おい君、聞いたか？結構な取沙汰を。」
と鼠の所へ駈けて来て言つたのが鼯鼠であります。

「聞けば、猫の奴獅子の掌中に入つたといふてはないか？これ先づ僕等も一と安心といふものだな君！」

「君待ち給へ、喜ぶのはまだ早い。たとひ掌中に入つたとて、イザとなつたら獅子の方が殺されるか分りやしないぞ、猫より強い動物はないんだから。君みために空なことをあてにしては駄目だ！」

と鼠が答へました。

私はこんな例を何遍見たか知れませんが、凡て臆病者は自分が恐れてゐるものは、世界中の者も皆同じに恐れてゐると思つてゐるのです。

四九 通行人と犬

ある夕方二人の友達が互に仕事の話をしながら歩いて行きました。すると俄かに一匹のひく犬が門の下から這ひ出して来て、二人に吠えかゝりました。とまた一匹何處からか出て来る、それから二匹、あれから三匹、またしく間に廻りぢうの家から何十匹といふ程犬が駈け寄りました。一人の通行人は最早石を手に拾ひました。すると、一人の方がそれに向つて、

「おい、よせ〜君。そんなことをしたつて到底避けられるものぢやない、却つて一層ひどく怒らしてしまふよ。かまはないでずん〜行かう。僕は奴等の氣性をよ〜く知つてる。」
と言ひました。

そして二人はその通りに數十歩ばかり行き過ぎました。と、犬共はだん／＼静まつて來ました。そして、仕舞ひには全く吠え聲が聞えなくなりました。

人のことを嫉む者は、何を見ても直ぐ吠え出すものです。けれどもそんなものに構はず自分の行く可き道を進んで行けば、彼等はいつしか鳴き止んでしまふものです。

此の寓話は、クルイロフが自分の天才と名聲とを嫉む者に對してとつた態度を示してゐます。

五〇 蝨斯と蟻

お轉婆の蝨斯は美しい夏の間歌を歌つて過ごしてゐましたが、ふり

かへる暇もなく、忽ち冬が眼の先へ現はれて來ました。清い野原は死んだやうになり、何處へ行つても棲家や食物の見付かつたあの明るい日は最早無くなつて了ひました。

一切の事が過去となり果て、今度は冬の寒さと、不自由と、飢餓とが追つて來たのです。蝨斯はもう歌も止めました。また、お腹が空いてゐては歌どころの騒ぎではありませぬ。

痛ましい苦しみで悩み抜いて、蝨斯はとある蟻のもとへ這ひ寄りました。そして、

「蟻さん、後生ですからどうぞ私を助けて、春の來るまで養つて下さい、そして温かい所へ置いて下さい。」

と言ひますと、蟻はその姿を眺めて、

「それはまた何うしたといふ譯です、私には解せませぬよ……一體お

前さんは此の夏中何を働いてゐましたか？」

「あゝ其の事ですか？ 蟻さん私共は柔かい草の中で間断なく歌つたり踊つたりしてゐました。てついでの方に氣を取られてしまつて……」

「さうですかではお前さん……」

「氣をとられてしまつて、何の考慮もなく、一と夏歌ひ暮してしまつたのです。」

「ではお前さん歌ひ暮したといふのですか？ それも仕事でせう。まあく御歸りになつて矢ッ張り踊つた方がいゝてせう！」

五一 犬の友誼

ボルカンといふ犬と、バルボスといふ犬とが、勝手窓の下で日向ぼ

つこをしてゐました。本来なら庭先の門の所で凝と家の番をしてる筈なのですが、雙方共々腹一杯食べたので、また一つには行儀のよい犬共でありましたから晝間のうちは誰にも吠えませぬので、二人は仕様事なしに種々な問題を議論してゐました。先づ最初は犬の任務といふ事、それから悪といふこと、善といふこと、そして最後に友誼といふ事に移つて來ました。

ボルカンの言ふ所はかうでした。

「兎に角仲の好いといふこと位愉快なものはあるまい、な君意氣投合して萬事萬端も互に盡し合つてさ、友と一緒になければ飲まず食はず、そして友の爲には我が身を惜まない……といふやうな仲なら實に愉快だ。所で僕は思ひ切つて言ふが、君と僕の仲が即ちそれなんだ。だから斯うしてゐて、時の經つのも知らないのだ。ネ、さうだらう？」

「いや、まて〜、その事に就ては、」

と答へて、バルボスは續けて言ひました。

「僕は君ずつと以前から痛心に堪へない事があるのだ。それは君と二人が一つ屋敷の犬でありながら、喧嘩をしない日。とては一日もないことだ。本當に何故だらう？主人達はあの通り親切な人達ばかりだ。だから吾々はひだるい思ひもせず落着いてゐられる。それにも一つ恥づかしくてならないのは、犬といふものが昔から仲よしの模範として有名なのであるにも拘はらず、犬同士の友誼はどうも人間同志のやうなわけに行かないことだ。」

「だからヨ、吾々が現代に於ける其の模範とならうてはないか？さア握手しやう！」

と叫んで、ボルカンは手を伸べました。

「では」

といふので、バルボスも手を出し、茲に新しい親友達は互に抱き合つて接吻しました。そして、こんな友誼は何處にも見られないと言つて喜びました。

「あゝわがオレストよ！」

「わがピラドよ！」

などと言ひ合ふ様全く争ひも猜みも憎しみも失せたやうでした。所が此の時勝手の中から料理人が一つの骨を抛り出しました。すると新しい親友共は、我先にと、其の骨片へ向つて突進しました。約束も和合も何處へやら、此のオレストとピラドとは互に牙を鳴らしての咬合ひてあります。棒や束を投げられても、それでも互に放しません。とら〜、水をぶっかけて漸く引分けることが出来ました。

世間にはかうした友誼が一杯あります。現代の所謂親友など、言ふ者は凡てその友誼に於て之に類したものだと言ふことが出来ます。一寸聞くと彼等同志は心が一つのやうでありますが一朝彼等に骨片を投げて見れば分ります。忽ち此の犬共と同じ事を演じますから！

此の寓話の中にあるオレストといふのは希臘のアガメノン王子のことであります。オレストは旅行する時必ず仲好しのピラドといふ者を伴れて行きました。此の二人は本當に何時如何なる時でも友の爲に我が一身を惜まなかつたので、その名が自然と眞の友情の標語となつたのです。

五二一 デミヤンのお吸物

「さアあなたどうぞ召し上つて下さい！」

「いやもう、俺は腹一杯頂きました。」

「ナニドツさりあるんですから、何卒もう一と皿。此の吸物は本當によくござへてあります。」

「俺はもう三杯頂いたので。」

「遠慮は要りません、勘定なんかお止めなさい！食べたくて食べるものは幾許食べても大丈夫です。健康の爲に、さア残らずやつて下さい！何て結構な吸物でせう。此通り脂ぎつてゐます！まるで脂肪で固まつてるやうです！さアあなた一つ精を出して下さい！何うです、此の通り鱈もはいつてゐます、腸もはいつてゐます、それから鱈魚の断片もあります。さア一と匙でもおつけ下さい！これ女房お前もお勧めしなけりや駄目だよ。」

かういふ調子に、デミヤンといふ人がその隣のフオカといふ人を
養應しました。お客に息を吐く暇も與へません。所がフオカといふ
人の顔からは、もうずつと前から汗が霰のやうに流れてゐるのです。
でも仕方なく、彼は最う一度皿を手にとりました。そして最後の力
をしぼつて、それを片付けました。

「それこそ俺はあなたが好きですよ。直ぐに勿體ぶつて體を歪め
るやうな奴は、俺は逆も我慢出来ません。——さア、も一つ如何です。も
一つ！」

と言つて、デミヤンはまだすゝめるのです。氣の毒なのはフオカと
いふ人です。幾許も吸物が好きだと言つても、かうつきつけられては
たまりません、逸速く帯と帽子とをひッ擱んで、無我夢中に我が家へ駆
け戻りました。そして其の時からといふものは、一步だもデミヤンの

所へ寄付きませんでした。

文士諸君、君等が若し眞の天才を有してゐるならば結構です。が、併
し、適宜に沈黙すべきことを知つてゐないと、そして自分の作物を人に
飽かせないやうにしないと、折角の文章もデミヤンの吸物みたやう
に胸を悪くするものです。

此の寓話の作られた動機はかういふ次第です。クルイロフは「露
西亞文學愛好家談話會」といふ文學會の一員となつてゐました。
その會ですることは、主として會員の創作を朗讀し批評するので
ありました。所がその席上で、時とすると、長い——作品が讀み續
けられるので、一同の者はいつしか情氣と疲勞とを強ひられたの
でした。此の厭はしい「文學的養應」が則ち寓話の種子となつた

のです。

五三二一つの樽

二つの樽が車に載つて行きました。一つには酒がはいつてゐましたが、他の一つは空っぽでした。

酒のはいつてゐる方は音も立てず、静かに歩を續けてゐました。が、空の方はガタ／＼ガタ／＼揺れて行きました。殊に舗石道などにかかると、ガタビシ／＼えらい物音を立て、埃を膝々と揚げるのでした。ですから、通行人は遠くの方からその音をきゝつけて、怖さうに傍へ寄つて小さくなつてゐました。

だが、空樽が幾許大きな音を立てたとて、それが何の役にも立つたのはありません。それに引換へて静かに行く方が却つて人の爲めにな

ります。

大きな人物は、事に當ると大音聲を出しますが、さもない時には静かに深い思索に沈んでゐます。

五四 トリーシカの外套

トリーシカの外套の脇の所が切れました。

「何も心配することはない！」

といふので、彼は針を手に取りました。そして兩の袖を四分の一宛切り取り、それで以て脇の所へ補布をあてました。で、ちやんと外套になりました。たゞ前よりも四分の一だけ餘計に手が出てゐるだけです。

「何もこれしきのことを悲しむには當らなう！」

と言つてはぬましたものゝ、どうも人が見ては笑ふてなりませぬ。
 「それならば直すまでの事だ。ナニ俺だつて阿呆ぢやあるまいし！
 袖を以前よりも長くすればいいんだ！」
 と言ひながら、トリシカは外套の裾をサラリと切りとつて、袖を長
 くしました。そして喜んでゐました。けれど、彼の外套は胴着よりも
 短かいのでした。

此の寓話を作る動機となつたのは、クルイロフ時代の地主達が華
 美な生活をするために、返済出来ぬ借金をして、自分の地所を質入
 し、更に又それを質入して遂に破産するに至つたその愚かしい不
 心得でありました。

五五 嘘言者

ある一人の貴族(多分公爵)だつたてせうが、遠い旅から歸つて来て、自
 分の友人と郊外散歩をしながら、旅の話を致しました。そして、有るこ
 と無いこと、出鱈目に法螺を吹きました。

「いや、我が輩の見て来たやうなものは、もう二度と見る譯には行くま
 い。此の國なんかは全體何ツて言ふ國だ？ 寒くなつたり、暑くなつた
 り、日が影つたと思へば、またカン／＼照り出す、まるで定りがないぢや
 ないか？ 所があらへ行く、と、其のまゝ天國だね！ 思ひ出しても氣持
 がいい！ 外套も蠟燭も全然不要なんだ。何時まで経つても夜闇の來
 ることはなく、年が年中いつも五月晴れなんだ。あちらの人は種子を
 播いたり、苗を植えたりするものは一人もありやしない。本統にあの

生之具合、熟り具合を見せたいものだ。例へば、ローマでだつたが、それは大した胡瓜を見たよ……あゝ神の御業は大なる哉と、あの時は全く我を忘れて驚嘆したねえ。かう言つたら、君は本當にはしないかも知れないが、事實その胡瓜は山位あつたよ。」

かう言ひますと、友人がそれに答へて、

「それは不思議だね！世間には何處へ行つても色々な不思議があればあるものだ。だが、その不思議を誰も彼もが認めるといふ譯のものではない。僕達だつて、今現にその不思議の一つに向つて進んでゐるのだ。いや、かうした不思議こそ何處にも見られないにきまつてゐる。だから僕はそれを疑はうとはしない。いゝかね、向ふに橋が見えるだらう、丁度僕達の行く手だから、所詮よく見られるには相違ないが、あの橋だね、一見何でもないやうに見えるけれど、あれて却々奇態な橋なん

だよ。それは、嘘言者には決して渡れないといふ不思議な橋なんだよ。それを若しも嘘言者が渡らうものなら、半分頃まで行かないうちに、きつと踏み外して水に落つちてしまふ。しかし嘘を言はない者は、たとひ箱馬車で通つても大丈夫なんだ。」
といひました。

「では、あの河は何んなだネ、深いかネ？」

「それは浅くはないよ。今行つて見れば分るが、君あれなどが先づ世界隨一の不思議だらうよ！いくらローマの胡瓜が大きくとも、たとへ山位あつても、山位だつたね、君さうだらう？」

「山！山と言つたつて種々だ、まア本統の所が家位さ。」

「何だか怪しいね、だがまアその不思議はそれとして、今僕達の差蒐からうとしてゐるあの橋こそ全く奇態だ。どうしたつて嘘言者を渡し

やしないのだから。此の春になつてからも最早雑誌記者が二人と仕立屋が一人落つちたよ。町の者は誰でも知つてゐる。たとへ胡瓜が家位の大きさとしても、兎に角不思議だねえ。全くその通り誤りがないものなら、たまげたものだ。」

「いや、それが大した不思議でもないのだよ。家と言へば、君は直ぐ此地のやうな大きな構へと思ふか知れないが、世間には色々ながある。あちらの家は何うかと言ふと、一と棟の家へ二人這入つても窮窟な位だ。立つことも坐ることも出来やしない。」

「さうかねえだがその中へ二人も這入れるやうな胡瓜があるとしても、それは正しく不思議だ。僕は儲かにさう信じる。だが、あの橋は何うだね、嘘言者が五六歩も行くと、忽ち水に落つちてしまふといふのだ。たとひ君のいふローマの胡瓜がいくら不思議でも……」

「一寸々々」と遮つて、嘘言者はとう／＼かう言つてしまひました。

「ね君、あんな橋を渡るよりも、何處かよい淺瀬を探して渡らうてはなつか。」

五六 好奇者

「いよウ君、何處へ行つて来たね？」

「博物館へ行つて、三時間ばかり歩いて来たよ。そして何から何までみんな見たが、實に驚いたもんだネ、あんなに驚いてしまつて君に何う話していいか解らない。あすこのことを不思議の館といふのは眞實の話だ。人智では逆も思ひつかぬやうなものを、天は豊かに與へてる。獸といひ、鳥といひ、それは様々なんだ！それからまた蝶や甲蟲や紅娘や蜚蠊や、——綠玉石のやうなものもあれば、珊瑚見たいなものもあり、微



人 理 料 と 猫

細極まる甲蟲だの留針の頭よりも小さい斑な紅娘だのもあつたよ。」
「ては象を見て来たか？象ッて一寸どんなものだい？僕は君が象の
つもりで山でも見て来たのぢやないかと思ふが？」

「え？彼處に象がゐるのかい？」
「ゐるとも。」

「さうかい、それは失敗つた、僕はその象を見ないて来てしまつた。」

五七 猫と料理人

ある一人のなか／＼智慧の廻る料理人が、自分の厨から酒場へ出掛
けて行きました。（此の人は信神の念に富んでゐたので、今日は叔母の
命日を記念する積りでした。）が、家には猫を残して置いて、食物へ鼠の
出て来た時の用心に備へました。